

魚類

① 名古屋市における水域環境および魚類の概況

名古屋市内には庄内川、天白川、山崎川、新川、堀川を含む5水系49河川が流れている。このうち全長96kmの庄内川は岐阜県恵那市に源を発し、全流域面積(1,010 km²)も県内では矢作川に次いで大きい。本河川に名古屋市内で流入する支流も多く、特に矢田川がその代表格である。庄内川水系に合流するいくつかの支流は、瀬戸市や長久手市など比較的良好な自然が残されている地域を流れる。庄内川が名古屋市という大都市を流れながらも比較的豊かな生物相を擁する理由は、本流および支流の上流域にある自然の豊かさにあると言えるだろう。一方、庄内川に次いで規模が大きいのは天白川水系であるが、源流は名古屋市のベッドタウンとして急速に都市化が進んできた日進市にあることと、扇川、植田川をはじめとする支流の多くが名古屋市内の住宅密集地域を流れること等により、流域の自然度は高くない。しかし、天白川下流域(感潮域付近)にはニホンウナギ、ハゼ類が一定数見られる。なお、天白川の流域にはかつて今よりも多くの農業用溜め池が存在していた。これは、東部丘陵地と呼ばれる市の東部地域では河川からの用水取水が困難であったためである。しかし、かつて市内に360箇所以上あった溜め池は、2004年までに116までその数を減らした。近年、これらの溜め池の多くは農業利用頻度の減少とともに定期的な池干し等のメンテナンス機会も減り、ブルーギル、オオクチバス等の外来魚類にとって生息しやすい、水位変動の少ない安定した環境条件を整えてしまっている。

1957年に出された名古屋市環境白書によれば、名古屋市内には21魚種が確認されていた。その後、1970年代にいったん18種に減じたが、2000年代にかけて44種にまで増加した。経時的な記録が残されている13河川(庄内川、矢田川、野添川、長戸川、天神川、香流川、扇川、荒子川、他)では、現在、外来魚類を含む63種を数えることができる。増加した要因の一つに外来魚類の侵入と定着が挙げられる。累積出現魚種数がもっとも多いのは庄内川で、単独で34種に上り、これに13河川を加えた全河川にほぼ共通して出現する魚種は、ヨシノボリ類、オイカワ、タモロコ、ドジョウ、カワムツ、モツゴ、マハゼ、フナ類、カマツカである。しかし、2009年を境に、外来魚類がこれらすべての河川で認められるようになった。たとえば、10河川以上でカダヤシ、ブルーギル、オオクチバスの3種がセットで生息している。加えて、カムルチー、ナイルティラピアの定着も確認されている。

② 名古屋市における絶滅危惧種の概況

2010年度補遺版では汽水域および河口域(干潟等)に生息する魚類について十分な文献および現地の調査を行うことができなかったため、レッドリストの対象魚種に含めなかった。しかし、川と海が会うエコトーンと呼ばれる生態系の境界は、生物多様性が高く、しかしその一方で干潟の埋め立てなどの環境悪化に拍車がかかっている場所でもある。また、汽水魚をレッドリストの対象とする先行事例も増えている。このような状況を踏まえ、2015年度版では、汽水域と干潟に生息する魚類を検討対象に含めた。さらに、生活史を通じて海と行き来すること

のない純淡水魚全般についても文献を中心に見直しをはかった。そのため、前版では1名で行った作業を汽水・淡水魚類に詳しい研究者7名で行うこととした。なお、リスト作成に先立ち、愛知県産魚類目録を作成することとした。そのため、1955年から2014年に出版された120編以上の文献の精査および現地・標本調査を行った。標本のなかには、古いものでは1925年作成のものも含まれていた。この結果、リスト化された170種以上から外来種、偶産種と考えられるものを慎重に除外し、70種程度に絞り込まれた。明確な名古屋市産魚類目録の作成は困難と判断し、これらをレッドリストの対象母集団として選定作業を行った。作業の結果、2010年度版の計19種のうち2種（イチモンジタナゴ、チチブ）がリスト外とされた一方で汽水魚9種を含む15種が新たに追加され、合計32種が選定された。リスト外とされたイチモンジタナゴは、元来名古屋市内には分布しなかったと判断したこと、チチブは市内に生息するが、個体数の減少が確認できなかったことがそれぞれの主な理由である。なお、ランクの決定には、一般市民や研究者らからパブリックコメント等を通じて寄せられた貴重な意見を参考にさせていただいたことを付記する。

新規掲載種およびランクに大きな変更が生じた魚種を中心に概略を述べる。これらのなかには、個体群サイズがきわめて小さく、生息場所が局在し、河川工事、溜め池の埋め立て、水田地帯・里地里山の消失、河口干潟の埋め立て等による生息場所の悪化や喪失、生息環境（餌生物量、産卵基質、水草などの隠れ場所等）の悪化、外来魚による捕食や競争、マニアによる乱獲等によって危機的な状況にあるものが含まれている。

絶滅危惧ⅠA類にランクされたカワバタモロコおよびトウカイヨシノボリは、近年の調査で初めて市内で生息が明らかになったものであり、両種ともに分布地点、個体数ともにきわめて限られている。絶滅危惧ⅠB類のカワムツは、精査した結果、生息が確認されている河川において個体数がさらに減少しているものと推測された。同じくⅠB類のトビハゼ、エドハゼ、マサゴハゼの3種は、いずれも県内複数の河口域・干潟域に生息するが、名古屋市内ではこれらの環境が悪化しており、個体数が減少している。また、ⅠI類からⅠB類にランクアップされたニホンウナギについては、個体数や分布に関して現在の状態と比較が可能な古いデータが存在しないため、実際には推定以上に少なくなっている可能性があり、国内の他の地域に比べても生息環境が明らかに悪い名古屋市においては、今後個体数がさらに減少していく可能性もある。そのため、予防原則的にも従来のⅡ類からⅠ類への変更が妥当と考えられた。

絶滅危惧Ⅱ類に掲載されたドジョウは、県内大部分の個体群が小さくなりつつあり、市内でも守山区等の一部の環境が比較的良好な地域を除けば確認することが難しくなっている。アユは、両側回遊魚であり、周辺個体群からの移入を鑑みれば「絶滅」は容易に起こらないと考えられるが、庄内川等においては遡上阻害や寄生虫の蔓延により十分に再生産していない可能性があり、前版の準絶滅危惧からⅡ類へとランクアップされた。汽水魚のシラウオは、産卵場所である河口域の砂底の減少、赤潮などの水質悪化で個体数が減少している。準絶滅危惧類には、タモロコ、スミウキゴリが新たに追加された。前者は、河川改修や圃場整備事業に伴う水路等のコンクリート護岸化により、隠れる場所ならびに産卵基質である水草や抽水植物の激減により個体数の減少が見られる。後者は、転石等の生息に必要な河床材料が減少したことにより、数を減らしている。最後に、情報不足として記載された6魚種については、いずれもカテゴリー判定に足る情報が十分に得られておらず、今後の知見の集積が望まれる。特に、コイ（在来型）については、生息の可能性がある以上、今後の遺伝的情報の蓄積を待ちつつ、交雑

のおそれのあるコイ（飼育型）の放流や河川における餌づけなどを厳しく制限する方法を検討すべきであろう。

名古屋市内に残された水辺の生息環境の多くは、様々な人為的影響により悪化の一途を辿っている。これにオオクチバスなど肉食性外来魚の定着が拍車をかけている。外来魚類は、在来魚の卵から成魚に至る成長段階すべてにおいて捕食・競争圧をかけるため、特に溜め池などの閉鎖水域および水路などの空間分化に乏しい水域において負の影響が著しい。本版に挙げた魚類のなかには比較的水質の汚濁に強い種もあり、現在は市内の各所において確認されるものの、個体数が少ないものが多く、今後、餌生物の減少、生息状況への配慮に欠けた河川改修および海浜工事等が続けば、個体数の減少が続き、将来ランクが上昇する恐れが強い。

（執筆者 谷口義則）

③ レッドリスト掲載種の解説

レッドリストに掲載された各魚類について、種ごとに形態的な特徴や分布、市内の状況等を解説した。記述の項目、内容等は以下の凡例のとおりとした。準絶滅危惧種についても、絶滅危惧種と同じ様式で記述した。

【掲載種の解説（魚類）に関する凡例】

【分類群名等】

対象種の本調査における分類群名、分類上の位置を示す目名、科名を各頁左上に記述した。目及び科の範囲と種の配列は原則として「日本産魚類検索 全種の同定 第三版」（中坊徹次（編），2013）に準拠した。

【和名・学名】

対象種の和名及び学名を各頁上の枠内に記述した。和名および学名（目、科、種名）については、「日本産魚類検索 全種の同定 第三版」中坊編（2013）によった。

【カテゴリー】

対象種の名古屋市におけるカテゴリーを各頁右上の枠内に記述した。参考として「第三次レッドリスト レッドリストあいち 2015」（愛知県，2015）の愛知県での評価区分、及び「レッドデータブック 2014 -日本の絶滅のおそれのある野生生物- 4 汽水・淡水魚類」（環境省，2015）の全国でのカテゴリーも併記した。

【選定理由】

対象種を名古屋市版レッドデータブック掲載種として選定した理由について記述した。

【形態】

対象種の形態の概要を記述した。

【分布の概要】

対象種の分布状況を記述した。また、本調査において対象種の生息が現地調査及び文献調査によって確認された地域について、各区ごとに着色して市内分布図として掲載した。ただし、情報不足カテゴリーの一部の種については、分布が不明であるため、地図を掲載しなかった。

【生息地の環境／生態的特性】

対象種の生息環境及び生態的特性について記述した。

【現在の生息状況／減少の要因】

対象種の名古屋市における現在の生息状況、減少の要因等について記述した。

【保全上の留意点】

対象種を保全する上で留意すべき主な事項を記述した。

【特記事項】

以上の項目で記述できなかった事項を記述した。

【引用文献】

記述中に引用した文献を、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

【関連文献】

対象種の関連する文献のうち代表的なものを、著者、発行年、表題、掲載頁または総頁数、雑誌名または発行機関とその所在地の順に掲載した。

魚類 <ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科>

スナヤツメ類 *Lethenteron* spp.**【選定理由】**

本種の減少には歯止めがかかっておらず、絶滅リスクがきわめて高い。本種の主要な生息場所である湧水環境が市内では緑地の減少と共に激減しており、残された数少ない生息場所も圃場整備および水質汚染の危機にさらされている。

【形態】

体長 20cm。体側に 7 つのエラ穴が開き、目と合わせて 8 つの目（ヤツメ）があるように見える。幼生（アンモシーテス幼生）には目が無い。ウナギに似るが、口には顎が無く、2 万種以上の魚類の中でもきわめて原始的な姿を留めた化石時代の生き残りの種である。

【分布の概要】**【市内の分布】**

守山区。

【県内の分布】

五条川水系、矢作川水系、豊川水系など。

【国内の分布】

北海道、本州、四国及び九州北部。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国。

【生息地の環境／生態的特性】

幼生期は、河床や川岸に溜まった砂泥に潜り、分解された落ち葉などの有機物や藻類を食べる。生まれてから数年間のアンモシーテス幼生期を経て、変態する（成魚になる）。その後は消化管が機能を失い、まったく餌を採らず、翌春に産卵して死ぬ。一生を河川で過ごす。非寄生性である。

【現在の生息状況／減少の要因】

繁殖場となる湧水や伏流水の消失により個体数が激減している。特に大きな河川では伏流水のあるワンドや細流が生息環境となるため、護岸工事などにより消失しやすい。本種は水質汚染に弱く、護岸工事等で淀みなどが消失したり、落ち葉等の有機物の滞留場所（緩流部）が失われると生息できなくなる。市内では著しい緑地の減少に伴う湧き水の枯渇や水温上昇により、ほぼ絶滅に近い状態にあると推測される。

【保全上の留意点】

湧水が出る農業用排水路も幼生にとって重要な生育場となる。コンクリート張りでも泥底なら可能性があるが、市内では絶滅状態に近く、緊急の保全策が必要である。

【特記事項】

スナヤツメは北方種と南方種に分けられる。愛知県内では、これまでのところ南方種しか確認されていないが、名古屋市内に生息する個体群は同定されていないため、両種を含めたスナヤツメ類とした。

【関連文献】

岩田明久, 1987. スナヤツメ. 川那部浩哉・水野信彦 (編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, pp.38-40. 山と溪谷社, 東京.
中坊徹次・甲斐嘉晃, 2013. ヤツメウナギ科. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, pp.144-145, 1753-1755. 東海大学出版会, 神奈川.
鈴木誉士・浅香智也・中川雅博, 2006. 琵琶湖につながる護岸された農業用排水路におけるスナヤツメ *Lethenteron reissneri* 個体数の経月および経年変動. 関西自然保護機構会報, 28(1):49-57.
山崎裕治, 2005. スナヤツメー湧水にひそむ生きた化石ー. 片野修・森誠一 (編), 希少淡水魚の現在と未来: 積極的保全のシナリオ. pp.37-48. 信山社, 東京.

カテゴリー

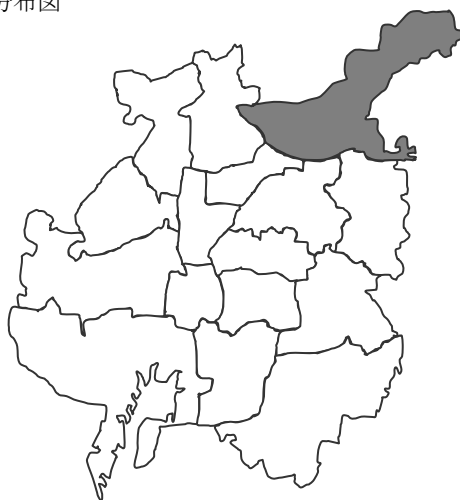
名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類



スナヤツメ類

岐阜県木曽川水系、2006年5月9日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <コイ目 コイ科>

カワバタモロコ *Hemigrammocyppris rasborella* Fowler**【選定理由】**

名古屋市内的における生息地はきわめて局所的であり、開発および外来魚の侵入による絶滅リスクがきわめて高い。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

体長 6cm。タモロコに似るが、口ひげは無い。また、腹縁がキール状になっている。側線は不完全で胸鰭上方までしか達しない。縦列鱗数は 30～35 枚である（細谷，2013）。体側には黒色の縦帯がある。産卵期の雄は色鮮やかな黄金色になる。雌は、雄より大型になる（前畑，2001）。

【分布の概要】**【市内の分布】**

非公表。

【県内の分布】

尾張地方（犬山市、瀬戸市、長久手町、津島市など）、三河地方（豊田市、刈谷市、岡崎市、新城市など）。

【国内の分布】

本州中部以西から九州北西部。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平野部の浅い池沼、溜池、小川、水路などに生息し、群れを作り表層付近を遊泳する。産卵期は、5 月中旬から 7 月下旬で地域により若干差がある。付着藻類から水生小動物など幅広く食う雑食性である（前畑，2001）。

【現在の生息状況／減少の要因】

個体数は比較的多いが、きわめて限られた地域で確認されるにすぎない。都市化にともなう河川整備、圃場整備による水田用水路の劣化や消失、水質汚濁を含む生息環境の悪化が進行したことが、減少の主たる要因である。加えて、オオクチバスなどの肉食性外来生物による捕食の影響も大きいと推測される。

【保全上の留意点】

水質改善、コンクリート護岸の回避が必要である。ワンドや浅場、抽水植物帯の確保、肉食性外来生物の捕食圧の低減も効果的である。また、施設内での系統保存を行うことが望ましい。

【特記事項】

黄金色に輝く雄の婚姻色が観賞魚として価値があり、かつ希少魚であるため、乱獲の対象となる。また、増殖目的で他地域の個体を放す、「善意の放流」が行われることもあり、遺伝子汚染が生じる危険性がある。行政、専門家、地域住民など多様な主体が連携して、本種と生息環境を保全することが緊急の課題である。豊田市や西尾市では、天然記念物に指定されている。

【引用文献】

細谷和海，2013. コイ科. 中坊徹次編，日本産魚類検索 第三版 全種の同定，pp.308-327,1813-1819. 東海大学出版会，神奈川。

前畑政善，2001. カワバタモロコ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海編，日本の淡水魚，pp.256-257. 山と溪谷社，東京。

【関連文献】

Watanabe, K. and S. Mori, 2008. Comparison of genetic population structure between two cyprinids, *Hemigrammocyppris rasborella* and *Pseudorasbora pumila* subsp., in the Ise Bay basin, central Honshu, Japan. *Ichthyological Research*, 55:309-320.



カワバタモロコ

名古屋市内、2014 年 6 月 22 日、鳥居亮一 撮影

市内分布図

生息地保護のため
分布図は示さない

(執筆者 浅香智也)

魚類 <コイ目 コイ科>

ヤリタナゴ *Tanakia lanceolata* (Temminck et Schlegel)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

市内各地で個体群の著しい減少が認められる。開発による生息地の破壊、産卵母貝である二枚貝類の減少、オオクチバス等の肉食性外来魚による捕食による生息数の激減にくわえて、飼育愛好家による過剰採集も脅威である。

【形態】

体長 8cm。比較的大型個体では 10cm 以上になる。体は側扁するが、体高はあまり高くない。本種に近縁なアブラボテも含め、背鰭の条間膜に紡錘形の暗色斑紋があり、やや長い 1 対の口ひげを持つ。婚姻色の出た雄は背部が蒼褐色で、体側は銀白色。頬部と腹部が朱色になり、背鰭と臀鰭に朱色の幅広い縦帯が出て縁辺には細い黒縁が出る。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川、天白川水系。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系。知多半島にも分布情報があるが、移入個体群である可能性がある。

【国内の分布】

北海道、南九州、沖縄を除く全国各地。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島西岸。

【生息地の環境／生態的特性】

日本産タナゴ類のなかではもっとも広く分布する。平野部の河川、用水路を主たる生息の場とするが、これらと連絡する浅い溜池、池沼などにも生息する。タナゴ類の中でも比較的流れのある場所を好み、砂礫底によく見られる。雑食性で、付着藻類・底生植物などを食べる。産卵期は 4～8 月で、雄がマツカサガイやニセマツカサガイなど二枚貝に縄張りを作り、これらの鰓に雌が産卵する。孵化した仔魚はそのまま母貝内で成長し、1 ヶ月ほどで母貝から浮出する。1 年で成熟し、寿命は 2～3 年である。

【現在の生息状況／減少の要因】

宅地・工業用地開発、河川改修等による生息地の破壊、二枚貝類の減少、オオクチバス等の肉食性外来魚による捕食により生息数が激減したものと推測される。名古屋市では生息地の保護対策は特に行っていない。飼育愛好家による過剰採集も脅威となっている。

【保全上の留意点】

生息場所と淡水二枚貝の保全、肉食性外来魚の侵入防止およびこれらの駆除が必要である。近縁な外来種による競争的な排除（例：霞ヶ浦のオオタナゴ）や交雑（例：愛媛県におけるアブラボテとの交雑）に注意が必要である。

【特記事項】

保全対象水域を決定し、保全策を講じる必要がある。

【関連文献】

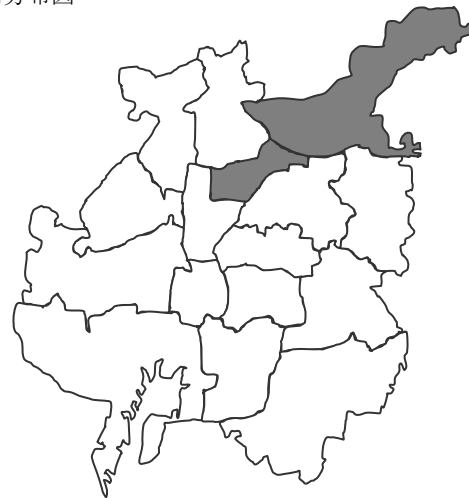
松葉成生・吉見翔太郎・井上幹生・畑 啓生, 2014. 分子系統地理が示す愛媛県松山平野におけるアブラボテの人為移入起源. 魚類学雑誌, 61:89-96.
長田芳和, 1987. ヤリタナゴ. 川那部浩哉・水野信彦（編）, 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, pp.354-355.



ヤリタナゴ

知多半島、2008 年 12 月 7 日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



（執筆者 谷口義則）

魚類 <コイ目 ドジョウ科>

トウカイコガタスジシマドジョウ *Cobitis minamorii tokaiensis* Nakajima**【選定理由】**

過去に知られていた分布域が著しく縮小しており、市内に現存する個体数もきわめて少なく、絶滅の危険性がきわめて高いと推測される。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

体長 12cm。体は細長く、やや側扁した円筒形。スジシマドジョウ属の中では小型で、最大体長は雄で約10cm、雌で12cm、一般に7cm以下の個体が多い。他のシマドジョウ属魚類とは、体が小さく、雄の第二次特徴である胸鰭基部の骨質盤が丸く、体側に縦帯があることで識別できる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川水系の1支流など。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系およびこれらの支流。

【国内の分布】

静岡県太田川から三重県宮川まで。

【世界の分布】

日本固有種。



トウカイコガタスジシマドジョウ

西尾市矢作川水系、2012年12月29日、鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

流れの緩やかな砂泥底の農業水路、河川本流等を主な生息場所としている。産卵期は5～7月で、一般に、雌雄とも1年で成熟するが、雌では2年目に成熟するものもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

かつての生息地の多くは、圃場整備をはじめとする農業用水路のコンクリート化、農業形態の変化にともなう乾田化や水路の水涸れにより消滅している。最近、生物に優しい農法を取り入れる試みがなされているが、生息場所の復元は難しい。

【保全上の留意点】

本種の存続には、河床に一定量の土砂（砂泥）が継続して供給され、三面コンクリート化されていないことが不可欠である。水田と農業用水路を往復できる構造を復元することも重要である。

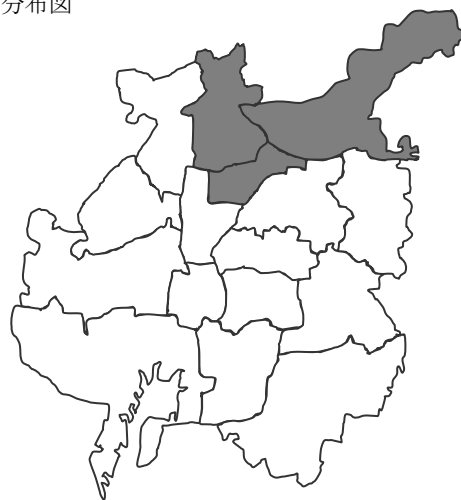
【特記事項】

スジシマドジョウ小型種東海型とされてきたが、2012年にトウカイコガタスジシマドジョウの標準和名が提唱された。他のスジシマドジョウ類についても全国的に分布域が縮小している。

【関連文献】

- 細谷和海, 1997. 日本の希少淡水魚. 長田芳和・細谷和海（編）, 日本の希少淡水魚の現状と系統保存, pp.3-21. 緑書房, 東京.
- 環境省自然環境局野生生物課, 2003. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブック― 4 汽水・淡水魚類, pp.102-103. 財団法人自然環境研究センター, 東京.
- Nakajima, J., 2012. Taxonomic study of the *Cobitis striata* complex (Cypriniformes, Cobitidae) in Japan. *Zootaxa*, 3586:103-130.
- 中島 淳・洲澤 譲・清水孝昭・斉藤憲治, 2012. 日本産シマドジョウ属魚類の標準和名の提唱. 魚類学雑誌, 59: 86-95.
- 斉藤憲治, 1993. スジシマドジョウ小型種と大型種の急減. 魚類学雑誌, 40:394-397.
- 斉藤憲治, 2001. スジシマドジョウ亜群. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編）, 日本の淡水魚, pp.386-391. 山と溪谷社, 東京.

市内分布図



(執筆 谷口義則)

魚類 <コイ目 ドジョウ科>

ホトケドジョウ *Lefua echigonia* Jordan et Richardson

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

県内各地において、湧水の枯渇、圃場整備、過度の農薬散布、宅地化により激減している。市内では水田の急減のほかに、緑地の激減による湧水箇所数および湧水量の減少に伴う湿地の喪失により本種の絶滅リスクは著しく高まっている。

【形態】

体長 8cm。体は細長く円筒形で、背鰭は腹鰭と対在するか後方にある。吻は短く、目は大きい。ひげの数は 4 対、体と鰭は茶褐色で暗色斑点が散在する。同属のナガレホトケドジョウやトウカイナガレホトケドジョウとは、体型や斑紋のパターン、生息場所の違いにより識別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系の小河川、周辺の小水路、緑地内の湿原、水田周りの水路。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な河川のほか、丘陵地域にある水田周辺水路、湿原、湧水起源の溜め池。

【国内の分布】

東北地方から三重県、京都府、兵庫県。

【世界の分布】

日本固有種。



ホトケドジョウ

岡崎市矢作川水系（湿地）、2010年4月10日、

鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

湧水を水源とする細流、湿原や水田周りの小溝に生息する。準冷水性の底生魚で、水温が 27℃ を越えると弱る。特に、やや開けた流れの緩やかな場所の砂泥底に多い。一般に、成長は 1 年で 3~4cm、2 年で 4~7cm に達する。産卵期は 3~7 月で、水草に産卵する。仔魚は孵化後すぐに着底せず、全長約 20mm になるまで底近くを浮遊している。底生小動物を中心とする雑食性。多くが 1 年で成熟するが、個体によっては 2 年目に成熟するものもある。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息地の減少から判断して個体数も減少していることは間違いない。かつての生息地の多くは宅地化や圃場整備により消失している。

【保全上の留意点】

湧水の消失や、水田周りの小溝の U 字溝化に伴い、全国的に減少している。1970 年代に農薬生産量の増大と共に本種が減少していることから、農薬の過度散布が要因であると推測される。本種の生息地復元を目的とするビオトープの造成がなされてきた場所もある。

【特記事項】

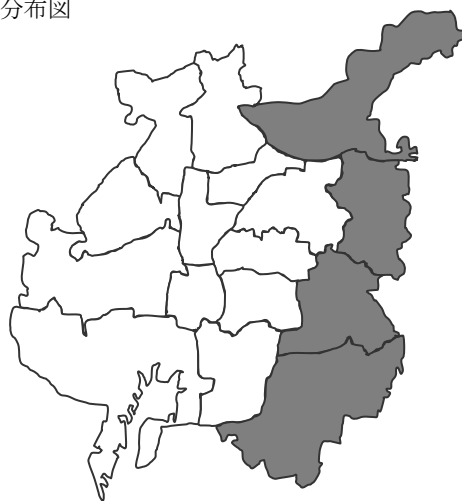
本種を指標とする水田の生物多様性保全も可能である。

【関連文献】

- 細谷和海, 2013. ドジョウ科. 日本産魚類検索 全種の同定 第三版, pp.328-334. 東海大学出版会, 神奈川.
 勝呂尚之, 2002. ホトケドジョウの初期飼育条件. *SUISANZOUHOKU*, 50(1):55-62.
 澤田幸雄, 1987. ホトケドジョウ. 川那部浩哉・水野信彦編, 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, p.400. 山と溪谷社, 東京.

(執筆者 谷口義則)

市内分布図



魚類 <ナマズ目 アカザ科>

アカザ *Liobagrus reini* Hilgendorf**【選定理由】**

本種は清流に生息し、河川の高い自然度の指標生物の1種である。愛知県内の河川における生息数も多くなく、名古屋市内においては局所的に分布するのみであり、絶滅に近いと推定される。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 10cm。体は赤褐色で腹部はやや白色を帯び、細長い。頭部は縦扁し、体の後部は側偏する。鱗は無く、側線は不完全。胸鰭と背鰭の第1鰭条は肥大して硬く、鋭い棘になっている。尾鰭の後縁はやや丸い。脂鰭は尾鰭に連続する。口ひげは前鼻孔部1対、上顎に1対、下顎に2対、計4対ある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川水系。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系。

【国内の分布】

宮城県、秋田県以南の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



アカザ

岡崎市矢作川水系、2012年4月29日、鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川の中・上流域の比較的水のきれいな流水域で、礫の多い河川に生息する。従来は自然環境が比較的豊かだった九州、四国、中国地方でも河川中流域から姿を消しつつあり、分布域の減少や分断化は全国に及んでいる。本種は比較的小さく、夜行性で水底を滑るように泳ぐ。昼間は比較的大きい浮き石の下に潜む。水生昆虫を捕食する。産卵期は5～6月で、石の下に生みつけられた卵塊を雄が保護する。

【現在の生息状況／減少の要因】

過去に調査が行われた地域では、河川の中流域の生息地が消滅している。本来、群れをなすような種ではなく、個体数はもともと多くないが、近年いっそう減少したと指摘されている。

【保全上の留意点】

河川の中・上流域の30cm以浅の平瀬や早瀬でよく見られる。隠れ場所や産卵場所として適度な大きさの礫を必要とする。しかし、河川改修（流路の直線化、床固めなど）や砂礫の採取などによって環境が破壊されてきたために、生息場所の減少は深刻である。

【特記事項】

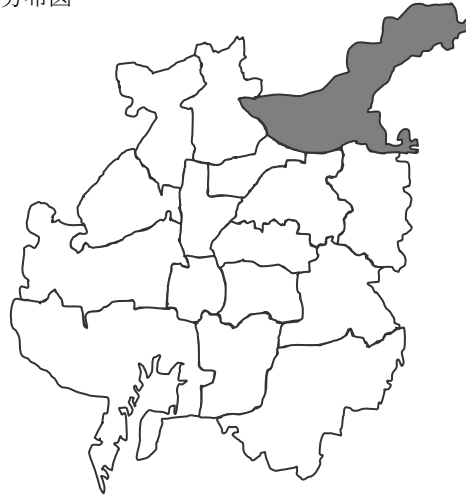
河床掘削で隠れ場所や産卵場所が消失してしまう。たとえば、河川工事で土砂が堆積すると礫間の空隙のみならず、餌生物も失われてしまう。

【関連文献】

森 誠一・名越 誠, 1987. アカザ. 川那部浩哉・水野信彦(編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚. p.410. 山と溪谷社, 東京.

Watanabe, K., 1994. A note on the reproductive ecology of the torrent catfish, *Liobagrus reini* (Siluriformes: Amblycipitidae). *Japanese Journal of Ichthyology*, 41:219-221.

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <スズキ目 ドンコ科>

ドンコ *Odontobutis obscura* (Temminck et Schlegel)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内における本種の生息域は依然限られており、現存する個体群も決して大きくないと推測され、今後実効性のある保全対策を実施しない限り、本種の絶滅リスクは小さくないと考えられる。

【形態】

体長 20cm。ハゼ類の中では大型で、頭部が大きく横幅があり、胴が短い。口は大きく、唇が厚い。うちわのような形の胸鰭が大きく発達し、腹鰭は左右に分離し、吸盤状にはなっていない。褐色の体色で、背鰭と尾鰭の基底に黒い斑紋がある。全身に大柄な暗斑がある。繁殖期の雄は全身が黒っぽくなる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系で確認されているが、個体数は少ない。

【国内の分布】

愛知県・新潟県以西の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本、韓国。



ドンコ

豊田市矢作川水系、2012年5月1日、鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

砂礫底のある中小規模河川の緩流部を好む。湖沼、水田周辺の用排水路にも生息する。純淡水魚であり、海との行き来はしない。大きめの礫や水草等を隠れ場所とし、強い縄張りを持つ。主に夜行性で、魚類、水生昆虫の他に、甲殻類等を捕食する。4～7月に産卵する。雄が石の下に巣を作り、誘引された雌は巣の天井に卵を産み、立ち去る。雄はその後卵を孵化するまで保護する。孵化後の仔魚は他のハゼ類と異なり、浮遊生活期を経ずに、即座に底生生活に入る。

【現在の生息状況／減少の要因】

愛知県では 1960 年代には広範囲に分布する普通種だったが、現在ではほとんど姿を見なくなってしまった。河川工事により礫河床が失われ、産卵環境が損なわれてしまったことが本種減少の最大要因であろう。

【保全上の留意点】

市内における本種の生息水域は非常に限られているものと推測される。まずは、これらの生息場所をこれ以上損なわないこと、産卵に必要な適度な大きさの礫を主体とする河床を復元することが重要である。

【特記事項】

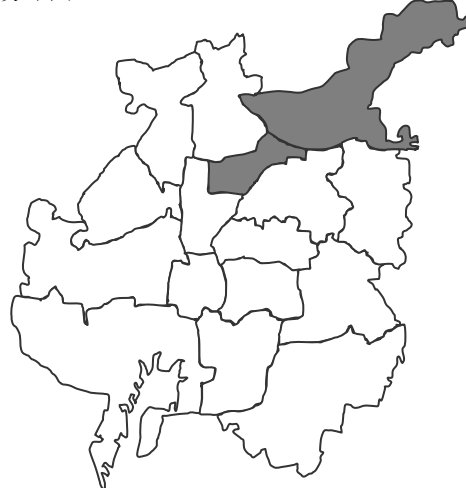
ドンコに限らず、ネット販売で入手した個体を意図的・非意図的に野外に放逐する行為が横行しているものと推測される。現に関東地方にも本種の分布が拡大しており、問題視されている。

【関連文献】

- 岩田明久, 2001. ドンコ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海(編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 改訂版, pp.558-560. 山と溪谷社, 東京.
- 向井貴彦・西田睦, 2003. 日本産ドンコにおけるミトコンドリア DNA の系統と関東地方への人為移植の分子証拠. 魚類学雑誌, 50(1):71-76.

(執筆者 谷口義則)

市内分布図



魚類 <スズキ目 ハゼ科>

トウカイヨシノボリ *Rhinogobius* sp. TO

【選定理由】

名古屋市における生息地は非常に限られており、いずれの個体群も、開発による生息地の消滅、外来魚による捕食、近縁種の侵入による交雑といったリスクにさらされている。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠA類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 4cm。小型のハゼ科魚類で、前鰓蓋管が無いことで他の日本産ヨシノボリ属魚類と区別される。体色は褐色でやや不定型な斑紋があり、雄の喉部は橙色になる。成熟した雄の第1背鰭は伸張しない（鈴木・坂本，2005）。

【分布の概要】

【市内の分布】

非公表。

【県内の分布】

犬山市、長久手市、日進市、岡崎市、豊田市、刈谷市、西尾市、豊川市。

【国内の分布】

伊勢湾周辺地域のみ。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

主に丘陵地に作られた溜め池に生息する。繁殖期は 4～6 月頃と推定される。仔稚魚は流れの無い場所で浮遊生活を送り、海に降ることはない（Tsunagawa et al., 2010）。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は濃尾平野から岡崎平野を中心に分布し、豊川市の溜め池を分布東限としていたが、豊川市の生息地は2000年代に埋め立てられて消失した。また、オオクチバスの生息する溜め池では激減もしくは絶滅するため、オオクチバスの放流によって多くの生息地が失われたと考えられる。形態と mtDNA の比較から、侵入した近縁種（他地域産のトウヨシノボリ、シマヒレヨシノボリ、ビワヨシノボリ）と雑種化して絶滅したと考えられる地点が犬山市、名古屋市、豊田市に見られることから、アユやコイ、ヘラブナの放流に混じって侵入したヨシノボリ類との交雑も減少要因になっている。名古屋市内にも生息地があるために、都市化しても生き残ると誤解されている可能性がある。しかし、いずれの生息地も孤立しており、周辺は宅地開発が進み、オオクチバスや近畿地方から侵入したヨシノボリ類の生息地が周辺に広がるため、現在残された生息地は危機的状況にさらされている。

【保全上の留意点】

溜池の埋立てによる生息地全体の改変は避ける。その上で、捕食性外来魚（オオクチバス・ブルーギル）、交雑可能な近縁種（トウヨシノボリ等）の侵入を避けるため、そうした外来種の混入する可能性のあるアユ、コイ、フナなどの放流を防止する必要がある。

【特記事項】

2005年に現在の新称が付けられた。東海地方の里山環境を特徴づける淡水魚である。

【引用文献】

鈴木寿之・坂本勝一，2005．岐阜県と愛知県で採集されたトウカイヨシノボリ（新称）．日本生物地理学会会報，60:13-20.
Tsunagawa, T., T. Suzuki and T. Arai, 2010. Otolith Sr: Ca ratios of freshwater goby *Rhinogobius* sp. TO indicating absence of sea migrating traits. *Ichthyological Research*, 57:319-322.

【関連文献】

向井貴彦・平嶋健太郎・古橋 芽・古田莉奈・淀 太我・中西尚文，2012．三重県鈴鹿市南部のため池群におけるヨシノボリ類の分布と種間交雑．日本生物地理学会会報，67:15-24.

鈴木寿之・向井貴彦，2010．シマヒレヨシノボリとトウカイヨシノボリ：池沼性ヨシノボリ類の特徴と生息状況．魚類学雑誌，57:176-179.

（執筆者 向井貴彦）



トウカイヨシノボリ

名古屋市、2012年11月15日、古橋 芽 撮影

市内分布図



魚類 <ウナギ目 ウナギ科>

ニホンウナギ *Anguilla japonica* Temminck et Schlegel

カテゴリー

【選定理由】

市内の分布地点は少なくないが、個体数の減少が著しいと考えられる。降河回遊魚である本種の移動の妨げとなる河川横断工作物が多数の河川に構築され、幼魚に必要な下流域の砂地環境およびコンクリート護岸化による成魚の隠れ場が減少している。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【形態】

体長 1m。成魚の背中側は黒く、腹側は白や黄色。レプトケファルス幼生（海を浮遊移動しやすい扁平な葉状形）期を経て変態し、円筒形の稚魚シラスウナギ（無色透明、体長 5cm 程度）となる。産卵のために降河する成魚個体は、背側と鰭が黒化し、腹面は銀白色を呈する。県内には移入種であるヨーロッパウナギも生息するが、外見から両種を識別することは困難とされている。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系および天白川水系など。

【県内の分布】

県内全域。矢作川水系に多い。

【国内の分布】

北海道から琉球列島にいたる全国各地。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、ベトナム、台湾、フィリピン。

【生息地の環境／生態的特性】

成魚は河川中・下流、河口のほか溜め池、海（内湾）にも生息する。降海した成魚はマリアナ諸島沖で産卵、2～3 日で孵化し、幼生は河口に到達後、遡河して小動物を捕食して成長し、5年から10数年ほどで成熟する。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内の河川における個体数密度は市外の河川の平均値のおよそ半分程度である。仔魚は海からなんとか遡上するものの、河川工事によって餌となる小魚やエビ類、隠れ場となる土砂や石の隙間などが減っている。幼魚は下流部の砂地で、成魚は河川内構造物の隙間や水際植物の影に潜むが、これらの環境が著しく損なわれている。

【保全上の留意点】

食物ピラミッドの頂点に立つ捕食者のニホンウナギが生息できる川を再生していくことができれば、他の多くの淡水生物にとっても居心地の良い川が復元されることにつながる。

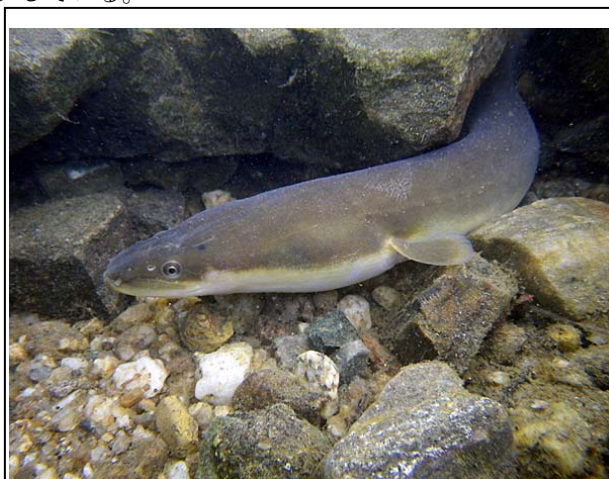
【特記事項】

幼魚は下流部の砂地に、成魚は河川内構造物の隙間や水際植物の陰に潜んでいる。

【関連文献】

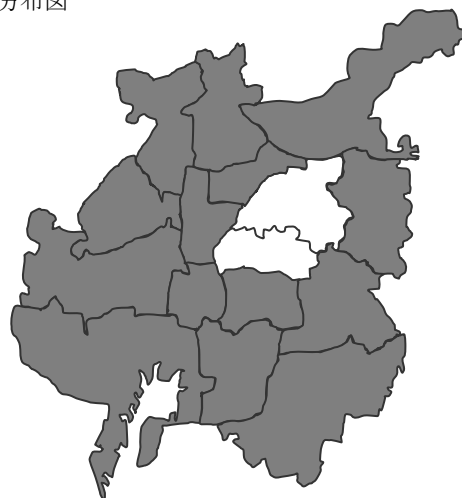
広正 義, 1975. 魚類. 庄内川の水生生物, pp.125-139. 建設省庄内川工事事務所, 愛知.
多部田修, 2002. ウナギ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編）, 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚（第3版）, pp.47-49. 山と溪谷社, 東京.
荒尾一樹, 2008. 庄内川で採集された魚類. 豊橋市自然史博物館研報, (18):25-27.

(執筆者 谷口義則)



ニホンウナギ
西尾市矢作川水系、2012年6月28日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



魚類 <コイ目 コイ科>

カワムツ *Candidia temminckii* (Temminck et Schlegel)**【選定理由】**

県内全域でみれば普通種であるが、本来比較的水のきれいな自然度の高い河川に生息する。かつては市内の主たる河川の上流部に豊富に生息していたと推察されるが、現在では確認される生息地点、生息数ともにきわめて限られている。

【形態】

体長 20cm。主鰭条数が臀鰭 10 条、側線鱗数 43～51 枚、側線上部鱗数 10～11 枚。体側中央に暗藍色の幅広い縦帯があり、腹部は白っぽい。臀鰭が大きく特に雄は明瞭な婚姻色を現し、頭部の下面や腹面が朱色や暗赤色となり、胸鰭・腹鰭の前縁も黄色～オレンジ色を現す。雌雄共に繁殖期に頭部、体表、臀鰭などに追星を現すが、近縁なヌマムツと異なり、鰓蓋には出現しない。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川支流。

【県内の分布】

五条川、矢作川水系、豊川水系、他。

【国内の分布】

東海地方以西の本州瀬戸内海沿岸、九州北部。ただし、関東、東北地方にも侵入。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

河川上流から中流などに生息する。流れの緩やかな淵に多く生息している。オイカワよりも上流部に生息する。河床に大きい礫が多く、河畔林によるうっ閉度が高い場所を好む。雑食性で、水草、付着藻類、水生・陸生昆虫類を利用する。繁殖期に雄間に順位関係が現れ、雌をめぐる競争がある (Katano, 1994)。産卵期は5月中旬～8月下旬頃で砂礫を好む。野生個体の体長頻度分布から寿命は3年程度であると考えられる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本来、河川上流部で夏季の水温が比較的低く保たれ、水質の良い場所に生息するため、都市化によるこれらの環境悪化が個体数減少の原因であると考えられる。河畔林から供給される餌となる陸生動物の減少も主たる要因である。産卵に必要な河床材料となる土砂の減少も拍車をかけている。

【保全上の留意点】

不用意な河川改修を慎むこと。河畔林の修復、復元により、隠れ場所、餌としての陸生動物を確保すること。夏季の水温上昇を抑制することも重要である。

【特記事項】

本種は雑魚の代名詞であり、どこにでも見られた魚がいつの間にか激減していたことを示す好例であろう。

【引用文献】

Katano, O. 1994. Aggressive interactions between the dark chub, *Zacco temminckii*, and the pale chub, *Z. platypus*, in relation to their feeding behaviour. *Japanese Journal of Ichthyology*, 40:441-449.

【関連文献】

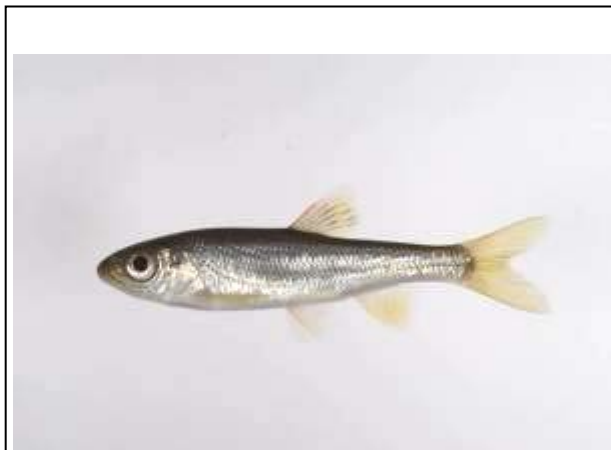
片野 修, 2002. カワムツ. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 第三版, pp.239-243. 山と溪谷社, 東京.

細谷和海, 2013. コイ科. 日本産魚類検索 第三版 全種の同定, p.318. 東海大学出版会, 神奈川.

Hosoya, K., H. Ashiwa, M. Watanabe, K. Mizuguchi and T. Okazaki, 2003. *Zacco sieboldii*, a species distinct from *Zacco temminckii* (Cyprinidae). *Ichthyological Research*, 50:1-8.

カテゴリー

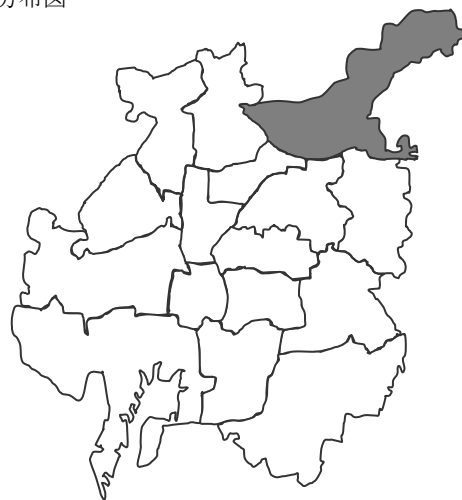
名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外



カワムツ

豊田市、2009年11月3日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <コイ目 ドジョウ科>

ニシシマドジョウ *Cobitis* sp. BIWAE type B

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【選定理由】

県内には矢作川水系をはじめ、本種の生息する河川は多い。しかし、市内では、河川の直線化、コンクリート護岸化等による緩流部の喪失、砂礫底の減少、移動を妨げる落差工の構築、産卵適地となる細流の消失により生息数が著しく減少している。

【形態】

体長 15cm。口ひげは 6 本。体側の斑紋は点列のものが多く、直線状の斑紋をもつ個体もある。雄の二次性徴として胸鰭基部の骨質板が細長くくちばし状になり、この点でスジシマドジョウ類との識別が可能である。尾鰭基部の斑紋なども区別点となる。また、雄の胸鰭は雌よりも長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系およびこれらの支流。

【国内の分布】

東海、北陸、山陰地方。

【世界の分布】

日本固有種。



ニシシマドジョウ

三重県津市、2005 年 9 月 30 日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川の中・下流部の砂質底に普通に見ることができるが、水の澄んだ池等にも見られる。河川では、特に平瀬から淵の砂底を好む。砂によく潜り、砂中で越冬する。砂を吸い込み、含まれる底生藻類やその半分解物、小型の水生昆虫等をこし取るように食べる。仔稚魚は浅い砂泥底の場所にすみ、原生動物や藻類などを食べる。産卵期は 4～6 月で、砂礫底に生える水生植物の根や茎に 1 個ずつ産着される。卵の直径は約 2mm で、卵黄は白色、卵膜は薄く粘着性がある。受精後 2～3 日でふ化する。ふ化後 2 日で全長 5mm 程度となり、外鰓が長く伸びる。体長 6cm 以上で成熟する。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川の直線化による緩流部の喪失による砂底あるいは砂礫底の減少、水質悪化、本流から産卵のために遡上できる細流の消失等により生息適地が奪われ減少している。

【保全上の留意点】

本種の生息に必要な砂礫の河床を保全する必要がある。河川工事においては、事後に砂礫が河床に滞留するよう緩流部を設けること、産卵時期の上流への移動を可能にするよう落差工等無くすることが重要である。

【特記事項】

2012 年にシマドジョウ類は細分され、中部地方の種にはニシシマドジョウの和名が提唱された。

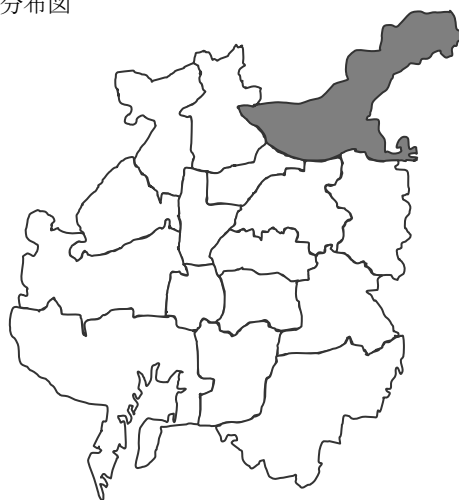
【関連文献】

君塚芳輝, 1989. シマドジョウ. 川那部浩哉・水野信彦 (編), 日本の淡水魚, pp.392-393, 山と溪谷社, 東京.

中島 淳・洲澤 譲・清水孝昭・斉藤憲治, 2012. 日本産シマドジョウ属魚類の標準和名の提唱. 魚類学雑誌, 59: 86-95.

(執筆者 谷口義則)

市内分布図



魚類 <スズキ目 カジカ科>

カマキリ（アユカケ） *Cottus kazika* Jordan et Starks

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧ⅠB類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【選定理由】

海と川を行き来する降河回遊魚である本種は、県下全域でも減少しているが、市内の河川においては、特に横断構造物（落差工、堰堤等）の影響により、仮に魚道が付いていても遡上が困難であり、個体数が著しく減少していると推定される。

【形態】

体長20cm。灰褐色で黒い帯が4本、背鰭の後方と尾鰭近くにある。鰓蓋の上方に4本の棘があり、アユなどの魚を引っかけて捕らえるという伝説がアユカケの名の由来である。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川、天白川水系。

【県内の分布】

矢作川水系、豊川水系を含む県内の主要な水系。

【国内の分布】

本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本固有種。



カマキリ（アユカケ）

名古屋市庄内川、2007年5月20日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

親魚は秋に川を降り、河口域や沿岸域で産卵する。ふ化した稚魚は海で成長し、初夏に河川を遡上する。稚魚は水生昆虫を主体に食べるが、成長すると魚食性が強まる。夜行性で、昼間は礫の間隙などに潜み、夜になると浅い瀬や淵に出てくる。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種は河川の遡上能力が低いことから、落差工（堰）や階段式魚道の落差が非常に小さくてもこれを越えて上流に行くことが困難である。

【保全上の留意点】

市内の主要な河川には横断構造物（落差工）が多数あることから、生息域が縮小しているものと推定され、魚道の設置等の早急な整備が望まれる。

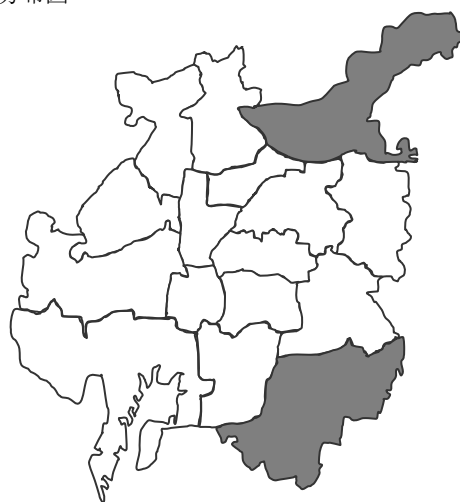
【特記事項】

福井県、熊本県では天然記念物に指定されている。

【関連文献】

後藤 晃, 1987. アユカケ. 川那部浩哉・水野信彦（編）, 山溪カラー名鑑. 日本の淡水魚, p.655. 山と溪谷社, 東京.

市内分布図



（執筆者 谷口義則）

魚類 <スズキ目 カジカ科>

ウツセミカジカ *Cottus reinii* Hilgendorf

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧ⅠB類

【選定理由】

生息条件が悪化しており、全国的にもきわめて危険な状態にあり、絶滅が危惧されている。市内では河川の直線化およびコンクリート護岸化に起因する土砂堆積量の激減および隠れ場所の消失等により、生息個体数が著しく減少していると推定される。

【形態】

体長 15cm。体色は淡褐色から暗褐色まで様々で、体側に暗色斑紋が4～5個ある。カマキリなど他のカジカ科魚類と比較して、鰓蓋にある棘が1本、胸鰭の軟条数が13～17軟条、眼から前鰓蓋骨棘へ向かって2本の暗色帯があること、腹鰭には顕著な斑紋がないことなどが特徴である。本種は近縁種のカジカと混同されることが多いが、カジカに比べて尾柄部分が細長い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川水系、天白川水系など。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な河川で広範囲だが少数が確認されている。

【国内の分布】

北海道南部の日本海側、本州、四国および九州西部。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

本種は肉食性で、水生昆虫や魚類を主な餌とする。一般的に卵径 1.8～2.4mm、一腹卵数は 600～1500 個程度とされる。指標種とされることも多く、カジカ類を復元する活動が行われている地域もある。

【現在の生息状況／減少の要因】

ウツセミカジカは、河川工事に伴う人工構造物や堰堤の影響で上下移動に制約を受けている。本種は水質の悪化にも弱い。砂礫底を回復するための復元工事でもある。今後、市内および県内における生息状況を明らかにする必要があるが、本種は形態による明確な分類が困難で、分子生物学的手法を取り入れる必要がある。

【保全上の留意点】

元々は市内の広範囲に分布していたものと推測される。下流域の堰堤による海からの遡上阻害を軽減し、生息水域の河床環境を復元する等を行う必要がある。産卵環境の復元も鍵となる。

【関連文献】

後藤 晃, 1987. ウツセミカジカ. 川那部浩哉・水野信彦 (編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, p.668. 山と溪谷社, 東京.
木村清志・岡田 誠・山下剛司他, 1999. 長良川河口域に出現する魚卵・仔稚魚. 三重大学生物資源学部紀要, 23:37-62.

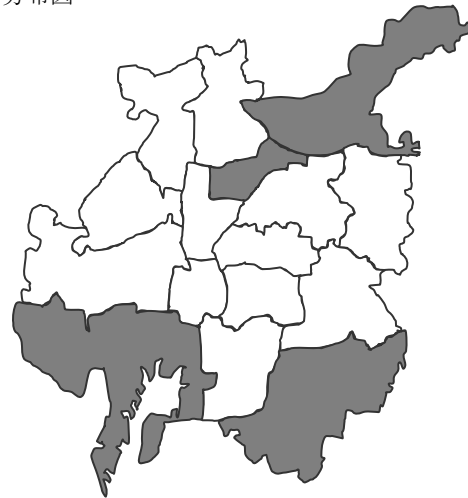
(執筆者 谷口義則)



ウツセミカジカ

岡崎市矢作川水系、2012年4月29日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



魚類 <スズキ目 ハゼ科>

トビハゼ *Periophthalmus modestus* Cantor**【選定理由】**

名古屋市内における分布は局地的で、干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事などの開発の影響を受け、生息地が大幅に減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長約8cm。頭と体は円筒形で、後方はやや側扁する。眼は上方に突出し、両眼の間隔は狭い。第1背鰭は丸い。腹鰭は吸盤状で、後縁はくぼむ。胸鰭基部の筋肉は発達し、これを腕のように使って泥干潟上を這い回る。体側に小さな黒色点が散在する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川河口、藤前干潟。

【県内の分布】

伊勢湾、三河湾の河口干潟。

【国内の分布】

東京湾から沖縄島。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、台湾。



トビハゼ

三重県木曽岬町、2010年4月18日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

内湾の湾奥や河川の河口域の泥底が発達した干潟に生息する。日中の干出時に泥干潟上で活動し、索餌や求愛行動を行う。陸上では主に皮膚を用いて空気呼吸を行う。尾部を使って泥面や水面を飛び跳ねて移動する。潮が満ちてくると水から逃げるように岸際の石や杭、湿生植物などに這い上がって休息し、干潮を待つ。産卵期は6～8月。雄は泥中に産卵巣をつくり、求愛ジャンプで雌を呼ぶ。11～3月の休止期には終日、泥底に掘った巣穴で過ごし、餌も食べない(岩田, 2001)。名古屋市内でも泥質の河口干潟で採集されている(荒尾ほか, 2007)。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市内における分布は局地的である。コンクリート護岸化に伴う岸辺の転石帯や植物帯の消失は生息場所・休息場所の減少の要因となっている。

【保全上の留意点】

名古屋港に流入する河川の河口域の泥干潟に広く分布していたと考えられるが、干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事、河川改修による生息環境悪化に伴って生息地が減少した。生息場所となる泥干潟の保全、休息場所となる岸辺の転石帯やヨシなどの植物帯の保全が必要である。

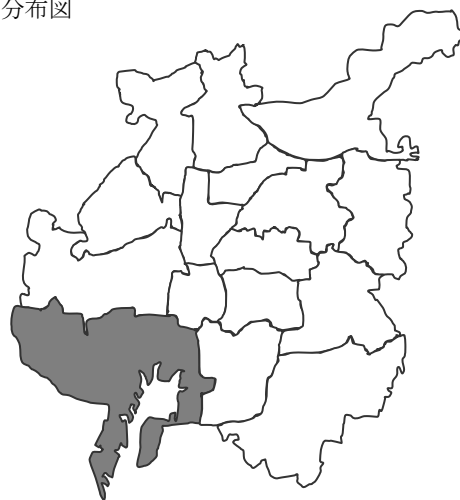
【引用文献】

荒尾一樹・山上将史・大仲知樹, 2007. 愛知県の河口域魚類. 豊橋市自然史博研報, (17):29-40.
 岩田勝哉, 2001. トビハゼ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海(編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 改訂版, pp.642-643. 山と溪谷社, 東京.

【関連文献】

鈴木寿之, 2010. トビハゼ. 環境省自然環境局野生生物課(編), 改訂レッドリスト 付属説明資料 汽水・淡水魚類, p.53. 環境省自然環境局野生生物課, 東京.

市内分布図



(執筆 荒尾一樹)

魚類 <スズキ目 ハゼ科>

マサゴハゼ *Pseudogobius masago* (Tomiyama)

カテゴリー

【選定理由】

名古屋市内における分布は局地的で、干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事などの開発の影響を受け、生息地が大幅に減少している。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 3cm。体は細長く、体高は低い。吻端は丸く突出し、上唇をわずかに被う。尾鰭後縁は丸い。尾鰭基部にくさび形の黒色斑がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

日光川、庄内川の河口干潟。

【県内の分布】

伊勢湾、三河湾の河口干潟、前浜干潟。

【国内の分布】

宮城県から沖縄島。

【世界の分布】

日本、鮮半島、台湾。



マサゴハゼ

三重県津市、2004年12月11日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河口干潟や塩水湿地の軟泥底や砂泥底に生息する。名古屋市内でも泥質の河口干潟、それに連なる前浜干潟を流れる水路や浅い水たまりで採集されている（荒尾ほか，2007）。産卵期は九州西岸で5～6月（道津，2014）、三重県揖斐川で6～8月（伊藤・向井，2007）と考えられている。産卵はアナジャコなどの小型甲殻類の生息孔内で行うと示唆されている（伊藤・向井，2007）。7～9月には成魚が生息する河口汽水域で着底した稚魚がみられる（道津，2014）。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市内における分布は局地的である。干潟の埋め立てや護岸工事、河川改修、土砂流入、水質汚染、底質汚濁などにより生息地が減少している。

【保全上の留意点】

干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事は直接的に生息環境を消滅させる原因となる。護岸工事や河川改修を行う際には、水質汚染、底質の有機汚染、土砂の流入による底質の変化などに留意する必要がある。また、汽水域の保全、小型甲殻類の保全も重要である。

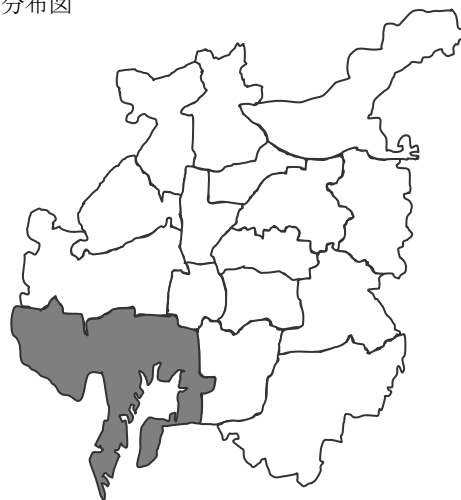
【引用文献】

荒尾一樹・山上将史・大仲知樹，2007．愛知県の河口域魚類．豊橋市自然史博研報，(17):29-40.
道津喜衛，2014．マサゴハゼ．沖山宗雄編，日本産 稚魚図鑑 第二版，p.1301．東海大学出版会，神奈川．
伊藤 亮・向井貴彦，2007．三重県揖斐川下流域におけるマサゴハゼの生活史．南紀生物，49(2):103-107．

【関連文献】

鈴木寿之，2010．マサゴハゼ．環境省自然環境局野生生物課（編），改訂レッドリスト 付属説明資料 汽水・淡水魚類，p.48．環境省自然環境局野生生物課，東京．

市内分布図



（執筆 荒尾一樹）

魚類 <スズキ目 ハゼ科>

エドハゼ *Gymnogobius macrognathos* Bleeker

カテゴリー

【選定理由】

名古屋市における分布は局地的で、干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事などの開発の影響により生息地が大幅に減少している。

名古屋市2015	絶滅危惧ⅠB類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 5cm。頭は縦扁、体後部は側扁する。上顎後端は眼の後縁を大きく越え、上顎より下顎がやや突出する。生時の頭と体は褐色で、腹部は白色。体側には下部を除き、数本の不明瞭な暗色斑がある。背鰭と尾鰭上部の鰭条に斑点がある。

【分布の概要】

【市内の分布】

日光川河口、藤前干潟。

【県内の分布】

伊勢湾、三河湾の河口干潟、前浜干潟。

【国内の分布】

宮城県から宮崎県にかけての太平洋、瀬戸内海、兵庫県から佐賀県にかけての日本海、有明海。

【世界の分布】

日本、ロシア沿岸州、渤海、黄海。



エドハゼ

愛知県西尾市、2012年1月20日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河口干潟や前浜干潟、塩水湿地に生息する。砂泥底に掘られたニホンスナモグリやアナジャコなどの小型甲殻類の生息孔内に生息する。名古屋市内でもアナジャコのものと思われる生息孔がみられる砂泥底で採集されている（荒尾ほか、2007）。産卵も小型甲殻類の生息孔内で行うと考えられている（鈴木、2003）。

【現在の生息状況／減少の要因】

名古屋市内の分布は局地的である。生息地では釣り餌用にアナジャコなどの小型甲殻類が採集されている。ポンプを使った小型甲殻類の採集は生息孔をも破壊することになり、生息に与える悪影響は大きい。

【保全上の留意点】

干潟の埋め立てや浚渫、護岸工事は直接的に生息環境を消滅させる原因となる。本種は還元層が形成されていない砂泥底に生息するため（鈴木、2003）、底質の有機汚染、土砂の流入による底質の変化などに留意する必要がある。また、生息・産卵に必要な小型甲殻類の保全も重要である。

【引用文献】

荒尾一樹・山上将史・大仲知樹、2007. 愛知県の河口域魚類。豊橋市自然史博研報、(17):29-40.

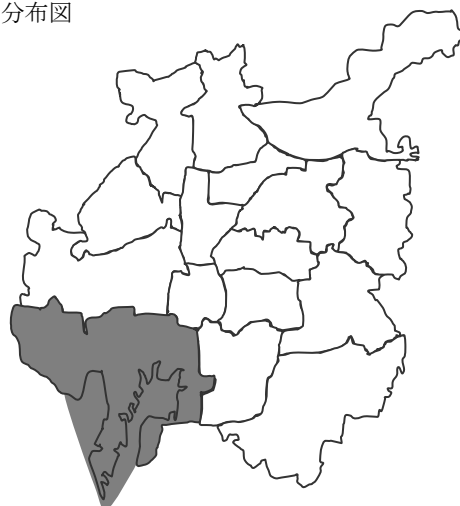
鈴木寿之、2003. 環境省自然保護局野生生物課（編）、エドハゼ。改訂・絶滅のおそれのある野生生物 ―レッドデータブック― 4 汽水・淡水魚類、pp.136-137. 自然環境研究センター、東京。

【関連文献】

Stevenson, D. E., 2002. Systematics and distribution of fishes of the Asian goby genera *Chaenogobius* and *Gymnogobius* (Osteichthyes: Perciformes: Gobiidae), with the description of a new species. *Species Diversity*, 7:251-312.

鈴木寿之・増田 修、1993. 兵庫県で再発見されたキセルハゼと分布上興味あるハゼ科魚類4種。伊豆海洋公園通信、4(11):2-6.

市内分布図



(執筆者 荒尾一樹)

魚類 <コイ目 コイ科>

ゼゼラ *Biwia zezera* (Ishikawa)

カテゴリー

【選定理由】

生息に適する砂および泥底の淀み、産卵基質となる水生植物根、仔稚魚の生育に必要な河原の一時的水域等の環境が激減しており、個体群が減少傾向にある。

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 10cm。細長く、前部がやや縦扁し後部が側扁する灰白色の体色の底生魚。体側には完全な側線を持ち、瞳と同大程度の円形の暗色斑が縦に並ぶ。口は小さく、吻端の下方に開き、吻は全体的に短く丸い。口ひげは無く、唇はなめらか。眼は高い位置にある。雄は紫黒色の婚姻色が全身に現れ、胸鰭前縁に追い星が出る。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系。

【県内の分布】

木曽川、庄内川、矢作川水系など。

【国内の分布】

琵琶湖・淀川水系および濃尾平野の水系、山陽地方および九州北部に自然分布する。北陸、関東地方および新潟県にも移殖による分布が見られる。

【世界の分布】

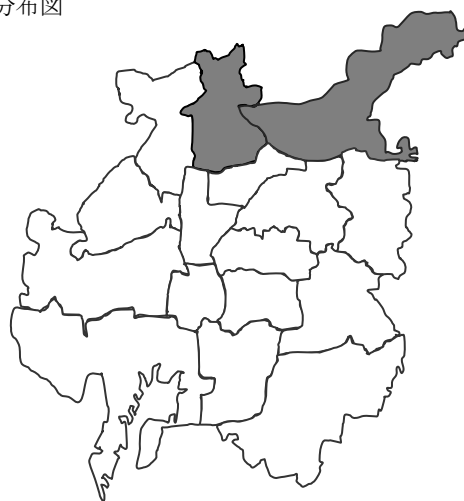
日本固有種。



ゼゼラ

西尾市矢作川水系、2009年4月12日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



【生息地の環境／生態的特性】

河川下流域、平野部の湖沼の流れの少ない淀みにある砂および泥底を主に生活の場とする。口が小さい本種は、底生藻類、小型の底生動物プランクトン、沈殿した有機物などを摂食する。4～7月に産卵し、川岸の水生植物根に粘着卵を固着させる。卵塊を雄親が保護する。雌雄ともに1歳で成熟し産卵後死ぬ。

【現在の生息状況／減少の要因】

庄内川水系に生息するが、個体群サイズは小さく、環境悪化や破壊により減少傾向にあると見られる。

【特記事項】

琵琶湖水系からの個体の移入による遺伝的攪乱が生じている可能性がある。

【関連文献】

細谷和海, 2002. ゼゼラ. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 (第3版), p.317. 山と溪谷社, 東京.
堀川まりな・向井貴彦, 2007. 濃尾平野におけるゼゼラのミトコンドリア DNA 二型の分布. 日本生物地理学会会報, 62:29-34.

(執筆者 谷口義則)

魚類 <コイ目 ドジョウ科>

ドジョウ *Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor)**【選定理由】**

水路のコンクリート護岸化を含む農業形態の変化などにより、大部分の個体群で個体数が減少している。外来種のカラドジョウによる競争や置き換わりなどの影響も懸念される。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	情報不足

【形態】

体長 20cm。雌は雄よりも大きくなる。体形は細長い円筒形。口には上顎に 3 対、下顎に 2 対の計 5 対 10 本のひげがある。体色は灰褐色で、背面に不明瞭な斑紋を持つ。腹面は淡色で斑紋がない。尾鰭と背鰭に褐色の小斑が散在し、尾鰭基部上角に小さな黒色斑がある。

【分布の概要】**【市内の分布】**

天白川水系、庄内川水系など。

【県内の分布】

県内各地。

【国内の分布】

北海道から沖縄県。

【世界の分布】

日本、ロシア、中国、朝鮮半島、台湾、ベトナム北部、ミャンマー。



ドジョウ (幼魚)

碧南市 (農業用水路)、2007 年 8 月 11 日 鳥居亮一 撮影

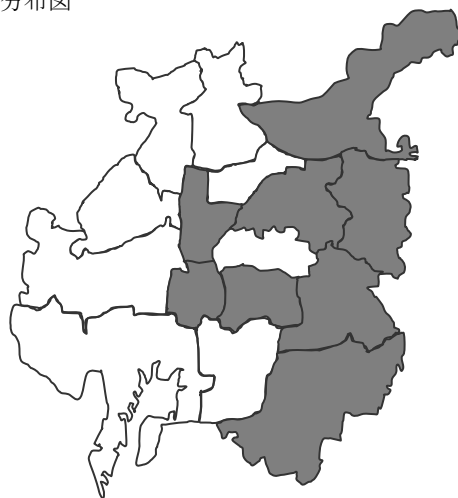
【生息地の環境／生態的特性】

平野部を中心に、河川緩流域やワンド、水路、浅い池沼の泥底または砂泥底、水田、湿地に生息する。冬季には水が無い湿った土中で越冬する個体もある。雑食性で、主にユスリカ幼虫などの水生昆虫を捕食する。産卵期は 4～8 月。夜間、雄が雌に巻き付き、産卵・放精し、卵は泥上にばらまかれる。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内の平野部に広く生息していたが、都市化、河川改修、圃場整備事業に伴う水路のコンクリート護岸化、乾田化や転作に伴う水路の干上がり、農薬散布により激減。落差工など構造物による繁殖に伴う移動の阻害も大きく影響していると考えられる。また、名古屋市内においては、外来種のカラドジョウの分布域が広がっており、競争や置き換わりなどの影響が懸念される。

市内分布図

**【保全上の留意点】**

水田地帯における水路の干上がり防止策ならびに河川と水路、水田の水域のつながりを復元させ、生息・繁殖に伴う移動を妨げない対策が必要である。また、釣具店やペットショップ等でカラドジョウや他地域産のドジョウ類が販売されており、それらの野外への放流防止が課題である。

【関連文献】

細谷和海, 2013. ドジョウ科. 日本産魚類検索 第三版 全種の同定, pp.328-334. 東海大学出版会, 神奈川.
 斉藤憲治, 1989. ドジョウ. 川那部浩哉・水野信彦 (編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, pp.382-385. 山と溪谷社. 東京.
 清水孝昭, 2014. ドジョウ: 資源利用と攪乱. シリーズ・日本の希少魚類の現状と課題. 魚類学雑誌, 61(1):36-40.
 谷口義則, 2012. カラドジョウ. STOP! 移入種 守ろう! あいちの生態系～愛知県移入種対策ハンドブック～, p.81. 愛知県環境部自然環境課, 愛知.

(執筆者 鳥居亮一)

魚類 <サケ目 アユ科>

アユ *Plecoglossus altivelis altivelis* (Temminck et Schlegel)

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋港周辺および伊勢湾の海洋環境の悪化、遡上河川の水質汚濁、河川横断構造物による稚魚の遡上阻害等により、市内における本種の出現河川数は少なく、回復の糸口はつかめていない。

【形態】

体長30cm。ただし、10cmほどで成熟する個体群や地域もある。背側は青みがかったオリーブ色で腹側は銀白色で、背鰭が黒く、特に縄張りを持つ個体では胸鰭後方に大きな黄色の楕円形斑が一つ現れる。脂鰭の先端が鮮やかな橙色。唇は厚いが、柔らかい。秋に性成熟すると体全体に橙色と黒の婚姻色が現れる。雄では追星の出現が著しく、体の表面がざらざらになる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系、山崎川。

【県内の分布】

矢作川、豊川の両水系をはじめとする主要河川。

【国内の分布】

北海道から鹿児島。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、ベトナム北部。

【生息地の環境／生態的特性】

アユは川魚であるが、仔稚魚は海洋生活を送るため、両側回遊魚と呼ばれる。成熟したアユは秋に河川下流域に降り、砂や小礫の多い瀬で産卵する。ふ化した仔魚は卵黄嚢を吸収しながら数日のうちに海に流下し、越冬しながら動物プランクトンを利用して成長する。翌年4～5月頃に5～10cm程度になり、遡河する。この時期、小型水生昆虫や陸生昆虫も捕食するが、付着藻類（珪藻類）を主食とするようになる。藻類が多い場所を中心に縄張りを作り、他個体の侵入から激しく防衛する。産卵を終えたアユは1年間の短い一生を終える。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種の個体数は、特に仔稚魚期を過ごす海洋環境（水温、溶存酸素濃度、餌となる動物プランクトン量など）の状態によって著しく左右されるようである。市内では、庄内川や山崎川に遡上するアユが話題になるが、遡上数は多くない。くわえて、取水堰、落差工などの河川横断構造物による仔魚の降河、稚魚の遡上の阻害も本種の個体数に影響を及ぼす。

【保全上の留意点】

伊勢湾、名古屋港周辺の海洋環境の改善が重要な鍵を握る。河川内のすべての構造物（堰堤等）には十分な流量をもつ魚道を設置する必要がある。

【特記事項】

都市河川にアユを復活させるためには、生活排水流入などによる水質の改善も重要課題である。

【関連文献】

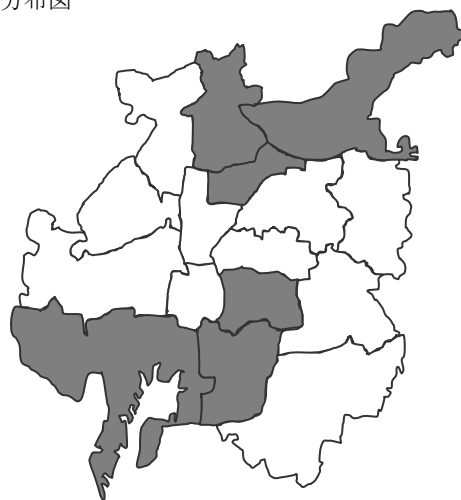
- 井口恵一郎, 1994. アユ-両側回遊から陸封へ. 後藤・塚本・前川編, 川と海を回遊する淡水魚-生活史と進化, pp.128-140. 東海大学出版会, 東京.
- 西田睦, 2002. アユ. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 (第3版), pp.66-79. 山と溪谷社, 東京.



アユ

田原市、2009年10月25日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <サケ目 シラウオ科>

シラウオ *Salangichthys microdon* (Bleeker)**【選定理由】**

汽水域の水質悪化、河口干潟の埋め立てや浚渫といった開発により、個体数が減少している。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	絶滅危惧Ⅱ類
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 8cm。脂鱗があり、体は細長い。体の大部分に鱗が無い（雌：無鱗、雄：臀鰭基底のみに 16～18 枚の鱗がある）。吻が長く口蓋骨歯があり、下顎は上顎より前に出る。下顎歯数 16～25。胸鰭の条数は 13～19 で、胸鰭は大きく胸鰭基底上端は目に達する（細谷，2013）。生時の体色は透明で、小黑点が咽から排泄口にかけての腹面に 2 列ある。また、小黑点が、両顎の先端、鰓孔の後縁、尾鰭の鰭条、胸鰭第 1 鰭条に沿ってある。死後は白色になる（宮内・千田，2001）。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川。

【県内の分布】

境川、矢作川、豊川などの河口。油ヶ淵。

【国内の分布】

北海道から九州。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、サハリン。

【生息地の環境／生態的特性】

生まれて 1 年以内に（産卵して）死ぬ「年魚」である。主に汽水域に生息し、産卵期の 2～5 月に河川に遡上し、砂底で 1 回産卵する。遡上期には、雌雄の離合集散が非常に顕著で、10～15 日の短期間で行われている（堀田・田村，1954）。動物プランクトンやイサザアミなどを食べる（宮内・千田，2001）。

【現在の生息状況／減少の要因】

産卵場所である河口域の砂底の減少や、赤潮や青潮などの水質悪化で、個体数が減少している。また、集中豪雨などの自然災害による影響も大きい。

【保全上の留意点】

産卵環境として砂底を好むことから、産卵期前後に河川干潟の埋め立てや浚渫などの攪乱を避けることや、砂底を泥底に変化させない工夫が必要である。また、生息地の水質を改善する必要がある。

【特記事項】

シラウオは名前のよく似ているシロウオと混同されるが、シロウオはスズキ目ハゼ科の魚類である。愛知県ではシロウオは確認されていない。

【関連文献】

宮内康子・千田哲資，2001. シラウオ. 川那部浩哉・水野信彦（編），山溪カラー名鑑改訂版 日本の淡水魚，pp.82-83. 山と溪谷社，東京。

堀田秀行・田村正，1954. シラウオ (*Salangichthys microdon* Bleeker) の生態について. 北海道大学水産学部研究彙報，5(1):41-46.

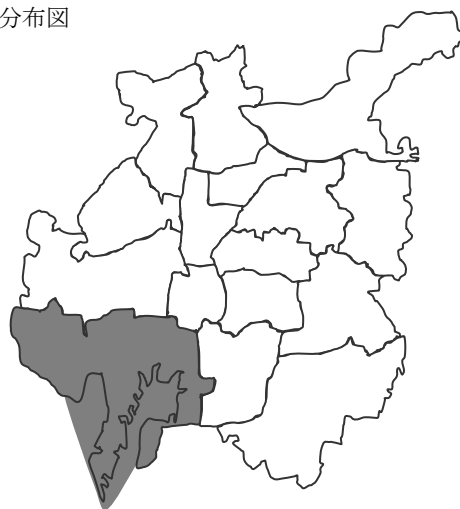
細谷和海，2013. シラウオ科. 中坊徹次（編），日本産魚類検索 第三版 全種の同定，p.361. 東海大学出版会，神奈川。



シラウオ

矢作川，2014 年 2 月 4 日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



（執筆者 浅香智也）

魚類 <ダツ目 メダカ科>

ミナミメダカ *Oryzias latipes* (Temminck et Schlegel)**【選定理由】**

元来全国に生息していた普通種である本種は、市内でも目に見えて減少してきた。水田周辺の自然破壊による生息数の減少に歯止めがかからない状態である。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	絶滅危惧Ⅱ類

【形態】

体長 40mm。頭部が縦に扁平し、体の後部は側扁している。側線は無く、全身がやや大きい円形の鱗に覆われる。背鰭は体の後方にある。頭部から背面中央に黒褐色の線がある。カダヤシに似るが、尾鰭が角ばっている点で見分けられる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

市内のほぼ全水系、溜め池など。

【県内の分布】

県内全域。

【国内の分布】

本州から琉球列島。北海道にも移植されている。

【世界の分布】

日本固有種。



ミナミメダカ

西尾市矢作川水系、2012年6月29日、鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

群れを作り、水田や溜め池周辺の細流に生息する。海水が多少入る場所でも生息（繁殖）できる。餌として、珪藻、動物プランクトン、微小な陸生動物（トビムシ）などを利用する。4～9月に繁殖する。巣は作らないが、産卵後繁殖ペアは縄張りを形成し、侵入個体に対して防衛する。雌は1腹20卵程度を産むが、体外に放出した受精卵を体に付けたまま泳ぎ、その後水草などに固着させる。産卵後は保護しない。自然条件下の寿命はおおよそ1～2年。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内では中小の河川、細流、溜め池などに広範囲に生息する。川幅 2m 程度の小規模な水路に限って言えば、平成 20 年度に調査をした 120 か所中 21 か所で本種の生息を確認した。本来、水田と連絡のある用排水路に多く生息し、水田をも主要な生息場所とする。しかし、農薬の影響に加えて、市内の水田面積の減少（現在市全域の 2%程度に過ぎない）、圃場整備（排水路の底面・側面のコンクリート張りを含む）による水草等の産卵基質の消失が本種の減少に拍車をかけてきた。

【保全上の留意点】

水田周辺の水路内の水の枯渇が問題である。冬季湛水（冬水田んぼ）も有効だが、同時に水路と水田を簡易な魚道で連絡するなどの工夫を要する。底面がコンクリートでも泥が堆積している排水路は本種の生息場所として機能する。

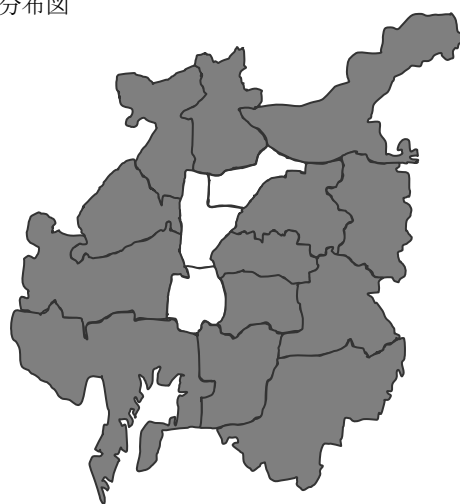
【関連文献】

宮崎智博・谷口義則、2009. 都市近郊農業排水路におけるカダヤシとメダカの個体群密度と微生物環境。野生生物保護, 12(1):13-20.

佐原雄二、2002. メダカ. 山溪カラー名鑑. 日本の淡水魚（第3版）, pp.428-431. 山と溪谷社, 東京.

(執筆者 谷口義則)

市内分布図



魚類 <スズキ目 カワアナゴ科>

カワアナゴ *Eleotris oxycephala* Temminck et Schlegel**【選定理由】**

市内河川における分布の詳細は十分に解明されていないものの、現時点では分布が局所的で、生息数も少ないと推定される。

カテゴリー

名古屋市2015	絶滅危惧Ⅱ類
愛知県2015	準絶滅危惧
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 25cm。アナゴとは名ばかりで、ハゼの仲間であり、体形も一般的なハゼ類に類似する。多くのハゼ類と異なり、腹鰭は2つあり吸盤状になっていない。個体間で体色変異が大きく、また同一個体でも状況によって変化することがある。通常の色は灰色、もしくは暗色で、背面が明色になる。明色時には頭部下面に小白色斑が見られる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川水系、天白川水系、山崎川。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な河川。

【国内の分布】

栃木県以南の本州、四国、九州。

【世界の分布】

日本、中国。



カワアナゴ

西尾市矢作川水系、2013年7月20日、鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

夏季に産卵するとされているが、繁殖生態を含む生活史全般について詳しくはわかっていない。仔魚は沿岸域で浮遊生活期を過ごし、体長20mm前後に成長して河川を遡上する。昼間は石やヨシの根塊等の間に潜み、夜間に甲殻類や小型の魚類を捕食する。下流域の砂礫底に生息し、昼間は流木や石の下、植物の陰などに隠れている。

【現在の生息状況／減少の要因】

天白川水系、庄内川水系、山崎川において生息が確認されている。

【保全上の留意点】

上記河川群における産卵場所や稚魚の育成場等を含む生活史全般について解明したうえで、個体群保全に必要な対策を講じていく必要がある。

【特記事項】

河川下流域に特徴的なヨシ帯や転石等、身を隠すことの出来る物理環境と豊富な餌生物を保全していくことも重要である。

【関連文献】

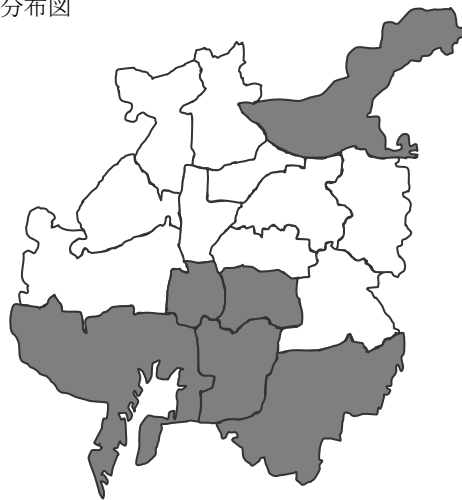
安藤重敏, 1999. 鳥取県産カワアナゴの採集と飼育の記録. 郷土と博物館, 44(2):1-5.

岩田明久, 1987. カワアナゴ. 川那部浩哉・水野信彦(編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, p.553. 山と溪谷社, 東京.

松尾敏生・高濱秀樹, 2001. 飼育条件下で観察されたカワアナゴの求愛産卵行動. 魚類学雑誌, 48(1):53-57.

(執筆者 谷口義則)

市内分布図



魚類 <コイ目 コイ科>

タモロコ *Gnathopogon elongatus elongatus* (Temminck et Schlegel)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

名古屋市内ではいくつかの主要な水系の中・下流域ならびに水路において生息が見られるが、圃場整備事業に伴う水路のコンクリート護岸化や河川改修、肉食性外来魚による捕食などにより、生息環境が悪化している。

【形態】

体長 7cm。体形はやや太い紡錘形。モツゴに似るが、吻は丸く、1 対の口ひげがある。体色は灰白色で、背面は緑がかかる。体側中央には 1 本の太い縦条が、側線より下の体側には 2〜3 本の暗色線が走る。移入個体として県内に分布する琵琶湖の固有種であるホンモロコに似るが、体形はずんぐりし、口ひげはより長い。

【分布の概要】

【市内の分布】

天白川水系、庄内川水系など。

【県内の分布】

県内各地。

【国内の分布】

関東以西の本州、四国。東北地方や九州の一部に移植。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

主に平野部の河川中・下流の緩流域や水路、池などに生息する。動物食にかたよった雑食性で、主にユスリカ幼虫、イトミミズ、水草などのほか、動物プランクトンを食べる。産卵期は 4〜7 月。卵は沈性粘着卵で、水草の根元等に産み付ける。

【現在の生息状況／減少の要因】

河川改修や圃場整備事業に伴う水路等のコンクリート護岸化による、隠れ場所ならびに産卵基質である水草等の激減。水質悪化も影響を与えている。また、本種の生息水域の多くにはオオクチバス、ブルーギルなどの肉食性外来魚の定着が見られ、卵から成魚まで各成長段階すべてにおける捕食圧が大きく影響し、生息環境が悪化している。

【保全上の留意点】

水草等を含む、身を隠すことのできる多様な物理的環境ならびに産卵に適した環境の保全、肉食性外来魚の駆除を進めることが重要である。

【特記事項】

県内には、タモロコに近縁で形態が酷似する琵琶湖の固有種であるホンモロコが分布しており、本種の生息地への侵入など、今後の動向に注意を要する。

【関連文献】

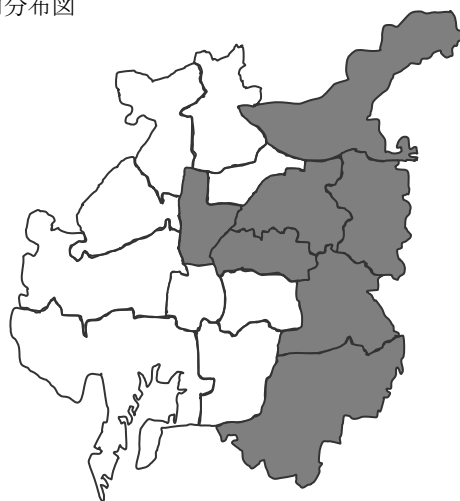
細谷和海, 1989. タモロコ. 川那部浩哉・水野信彦 (編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, pp.298-299. 山と溪谷社, 東京.
細谷和海, 2013. コイ科. 日本産魚類検索 第三版 全種の同定, pp.328-334. 東海大学出版会, 神奈川.

(執筆者 鳥居亮一)



タモロコ
西尾市矢作川水系、2012 年 4 月 27 日、鳥居亮一 撮影

市内分布図



魚類 <ナマズ目 ナマズ科>

ナマズ *Silurus asotus* Linnaeus

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

水質汚濁に比較的強いものの、河川工事によるコンクリート護岸化、大粒径の河床材料の消失、繁殖場所の減少と消失、餌生物となる小動物の減少により、生息数が減少しているものと推測される。

【形態】

体長 60cm。大きく扁平な頭部、幅広い口、長い口ひげを持つ。鱗が無く、体表は粘液で覆われる。目は小さく背側寄りで、腹側からは見えない。体色や斑紋は個体間で変異が大きい。下顎が上顎よりもわずかに長く突き出す。背鰭は小さいが、尻鰭の基底が長く、尾鰭と連続する。

【分布の概要】

【市内の分布】

ほぼ全域。

【県内の分布】

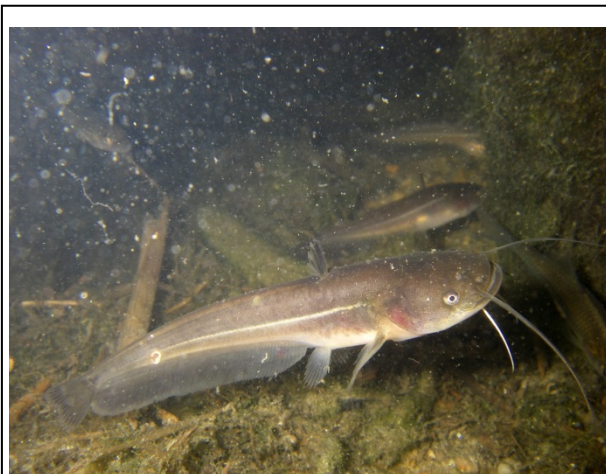
矢作川水系、豊川水系のほか、数多くの中小規模河川。

【国内の分布】

北海道から九州。

【世界の分布】

日本、中国大陸東部、朝鮮半島、台湾。



ナマズ

碧南市（農業用水路）、2007年8月11日、鳥居亮一 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川の緩流部、湖沼、水田の用排水路などに生息する。基本的に夜行性で、昼間は水底の岩や水草の物陰に潜む。食物連鎖の上位に位置する捕食者で、主に口ひげで索餌し、ドジョウ、カエルなどの小型魚類・両生類、甲殻類、水生昆虫などを捕食する。冬季は泥の中や岩の間に隠れ、ほとんど動かない。繁殖期は 5～6 月で、浅い水域に集まり、雄が雌の体に巻きつくという独特の繁殖行動の後、水草や水底に産卵する。雄は 2 年、雌は 3 年程度で性成熟に達する。

【現在の生息状況／減少の要因】

水質汚濁に比較的強いが、河川工事によるコンクリート護岸化により繁殖場所の減少と消失、餌生物となる小動物の減少により、生息数は減少しているものと推測される。

【保全上の留意点】

河川工事による大粒径の河床材料を取り除くと本種の隠れ場所が消失する。環境配慮型の河川工事を行う場合は、人頭大の礫の投入（捨て石工法など）が奏功する場合がある。

【特記事項】

ナマズはブルーギル等の外来魚を捕食することが知られるため、本種を増やすことにより外来魚個体群をある程度抑制できる可能性もある。

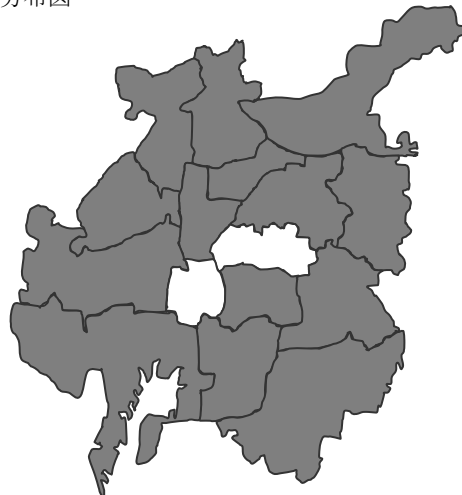
【関連文献】

片野 修・中村智幸・山本祥一郎・阿部信一郎、2004. 長野県浦野川における魚類の種組成と食物関係. 日本水産学会誌, 70(6):902-909.

片野 修・坂野博之・V. Boris, 2008. 設置型魚類自動捕獲器のブルーギルに対する捕獲効果. 日本水産学会誌, 74(1):14-19.

小早川みどり, 1989. ナマズ. 川那部浩哉・水野信彦(編), 山溪カラー名鑑. 日本の淡水魚, pp.412-415. 山と溪谷社, 東京.

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <スズキ目 ハゼ科>

スミウキゴリ *Gymnogobius petschiliensis* (Rendahl)

カテゴリー

【選定理由】

両側回遊魚である本種の移動を妨げる堰などの河川横断障害物の設置や、河川のコンクリート護岸化による生息場所・産卵場所の減少などにより個体数が減少していると推察される。

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長15cm。体側には7～8本の横帯がある。側線上に黒色の縦列斑は無い。産卵期には雌雄ともに腹鰭と臀鰭が黒ずみ、雌の腹部は黄色みを増す（石野，2001）。同属のウキゴリ、シマウキゴリに似るが、第1背鰭後部に黒色斑がない、尾鰭基底の黒色斑はくさび形であることから区別できる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系、天白川水系、山崎川。

【県内の分布】

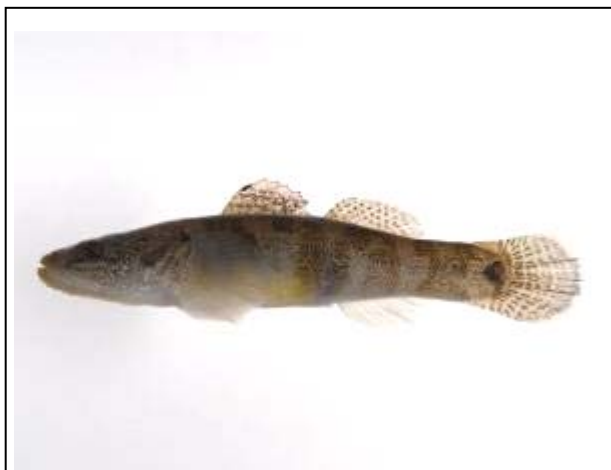
県内全域。

【国内の分布】

北海道から屋久島。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島。



スミウキゴリ

名古屋市天白川水系、2009年11月3日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川下流域～河口域、汽水域の河岸の植物帯や礫底に生息する。礫の下面に卵を産み付ける。ウキゴリやシマウキゴリに比べて下流で産卵する（石野，2001）。孵化仔魚は河川を流下する。浮遊期仔稚魚は初春から初夏にかけて浅海域に出現し、その後河川を遡上する（原田，2014）。

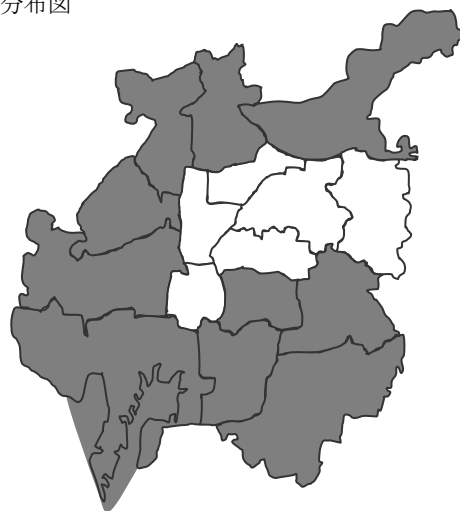
【現在の生息状況／減少の要因】

市内では5月頃に河川を遡上する多数の個体が採集されている（荒尾，2008）。成魚はウキゴリの成魚とともに採集されることも多い。堰などの河川横断障害物は本種の移動を妨げ、河川のコンクリート護岸化は生息場所・産卵場所の減少の要因となっている。

【保全上の留意点】

堰に設置される魚道はアユなどの産業重要種を対象に設計されることが多く、ハゼ科魚類も遡上可能な魚道の設置が望まれる。また、河川のコンクリート護岸化が必要な場合は生息場所となる河岸植物帯や礫底の保全が必要である。

市内分布図



【引用文献】

- 荒尾一樹，2008. 庄内川で採集された魚類. 豊橋市自然史博研報，(18):25-27.
 原田滋雄，2014. スミウキゴリ. 沖山宗雄（編），日本産稚魚図鑑 第二版，p.1271. 東海大学出版会，神奈川.
 石野健吾，2001. スミウキゴリ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 改訂版，pp.622-623. 山と溪谷社，東京.

【関連文献】

- 明 仁・坂本勝一・池田祐二・藍澤正宏，2013. ハゼ亜目. 中坊徹次（編），日本産魚類検索 第三版 全種の同定，pp.1347-1608,2109-2211. 東海大学出版会，神奈川.
 荒尾一樹・山上将史・大仲知樹，2007. 愛知県の河口域魚類. 豊橋市自然史博研報，(17):29-40.

（執筆者 荒尾一樹）

魚類 <スズキ目 ハゼ科>

ウキゴリ *Gymnogobius urotaenia* (Hilgendorf)

カテゴリー

名古屋市2015	準絶滅危惧
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【選定理由】

市内では出現頻度の低い魚種であり、減少傾向にあると考えられる。市内で見られる本種の多くは陸封された個体群であると考えられることから、よりいっそう河川環境への依存度が高いにもかかわらず、保全に有効な手立てが講じられていない。

【形態】

体長13cm。ハゼ類のなかでは大型の部類である。体は円筒形だが頭部は縦扁し、逆に尾部は側扁する。体色は半透明の黄褐色で、全身に黒褐色の斑点がある。第一背鰭の後半部と尾鰭の付け根に明瞭な黒斑点が一つずつあり、第二背鰭と尾鰭は白黒の縞模様となる。なお、近縁なスミウキゴリには第一背鰭に黒斑が無い点でウキゴリおよびシマウキゴリ両種と区別できる。また、シマウキゴリは第一背鰭後半部に黒斑があるが、ウキゴリほど大きくない。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系、天白川水系、山崎川。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系。

【国内の分布】

北海道、本州、九州の河川。

【世界の分布】

日本、サハリン、朝鮮半島。

【生息地の環境／生態的特性】

幼魚期を海で過ごす個体が多いが、河川に陸封化されるものもあり、中流、下流域、汽水域で見られる。水底から離れて中層を漂うように泳ぐこともあるため、ウキゴリが命名されている（ゴリはハゼ類の地方名）。口が大きく、食性は肉食性で、昆虫、甲殻類、小魚などの小動物を捕食する。産卵期は春で、雄が川底の石の下に産卵室を造り、雌は産卵室の天井に産卵する。雄は巣に残りふ化まで卵を保護する。仔魚は湖沼や海に降り、翌年成長した若魚が春から夏にかけて群れをなして川を遡上する。

【現在の生息状況／減少の要因】

本来は、緩流部と転石などが多い河川に見られるが、市内ではコンクリート護岸された河川にも生息している。しかし、緑地の減少、夏季の水温上昇、土砂流入量の減少、緩流部と水草域の減少等により生息数が減少している。

【保全上の留意点】

繁殖環境の保全、すなわち適切な河床材料の供給が重要である。そのため、環境配慮型の河川工事を行う際には、土砂が堆積しやすいように緩流部を設けることが重要である。

【特記事項】

捕食者である本種にとって、餌となる小型の水生動物の生息条件を整えることも重要である。

【関連文献】

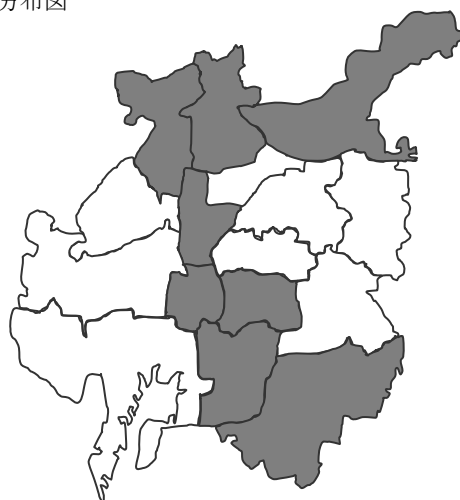
石野健吾, 1987. ウキゴリ. 川那部浩哉・水野信彦(編), 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚, pp.618-620. 山と溪谷社, 東京.
鶴田哲也・小池亮人・武島弘彦他, 2010. 明・暗条件下におけるオイカワ, ウグイおよびスミウキゴリのアユ仔魚捕食. 魚類学雑誌, 57(1):51-55.



ウキゴリ

名古屋市天白川水系、2009年11月3日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



(執筆者 谷口義則)

魚類 <コイ目 コイ科>

コイ（在来型） *Cyprinus carpio* Linnaeus**【選定理由】**

主に養殖・放流されてきたコイ（飼育型）との交雑・競争により減少したものと推察される。市内における確実な採集記録・情報が少ないため現段階でのランク評価は困難である。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	ランク外

【形態】

体長 60～100cm。外見は、やや側扁した紡錘形で吻部がとがり、口ひげが 2 対ある。また、背鰭棘状軟条が 4 本、分枝軟条数が 19～21 本で背鰭基底が長い。コイ（在来型）は、コイ（飼育型）に比べると体高が低く、赤みが強い。

【分布の概要】**【市内の分布】**

不明（情報不足）。

【県内の分布】

不明（情報不足）。

【国内の分布】

滋賀県琵琶湖北部地域のみ（松崎，2013）。他の地域は不明。

【世界の分布】

コイ（在来型）は日本固有（亜）種。コイ（飼育型）はユーラシア大陸に自然分布し、世界各地に産業目的で移殖されてきた。

**【生息地の環境／生態的特性】**

緩やかな流れの河川中・下流部や湖、池沼に生息する。雑食性で、貝類、水生昆虫、ミミズ類等の底生動物や、藻類、水草等の植物を摂餌する。産卵期は 4～7 月で水草などに卵を産みつける。

【現在の生息状況／減少の要因】

コイ（在来型）の詳しい生息状況は不明である。朝日遺跡（名古屋市西区～清須市）から、コイ（在来型）の咽頭歯と見られる骨が確認されている（山崎・宮腰，2005）。このため、かつては名古屋市周辺にもコイ（在来型）が生息していたと考えられる。しかし、現在の生息状況は不明である。コイ（在来型）が減少した原因は、養殖・放流されてきたコイ（飼育型）との交雑・競争と推測される。また、コイ（在来型）が好むとされる大きく深い河川や池沼等の生息場の消失も減少要因と考えられる。

【保全上の留意点】

コイ（在来型）の生息状況を調べ、効果的な保全対策の基礎となる生態学的知見の蓄積が必要である。

【特記事項】

近年、我が国に生息するいわゆる「コイ」は、コイ（在来型）とコイ（飼育型）という遺伝的に異なる 2 系統に分けられた（松崎，2013）。コイ（在来型）は、かつてコイ（野生型）と呼ばれていたが、ユーラシア大陸原産のコイ（飼育型）と遺伝的に異なり、日本在来であることが判明したため、現在の名称となった。瀬能（2009）は *Cyprinus melanotus* の学名を提案しているが、未だ幅広く認知されていない。

【引用文献】

- 松崎慎一郎，2013. 池沼におけるコイの水質や生物群集に与える生態的影響. 日本魚類学会自然保護委員会（編），見えない脅威「国内外来魚」，pp.39-50. 東海大学出版会，神奈川。
 瀬能 宏，2009. 日本産コイ（コイ目コイ科）のルーツ解明と保全へのシナリオ. 科学研究費補助金成果報告書。
 山崎 健・宮腰健司，2005. 朝日遺跡出土の魚類遺存体. 愛知県埋蔵文化財センター 研究紀要，(6): 34-45. (財)愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター，愛知。

【関連文献】

- 細谷和海，2001. コイ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），山溪カラー名鑑改訂版 日本の淡水魚. pp.334-338. 山と溪谷社，東京。
 馬淵浩司・瀬能 宏・武島弘彦・中井克樹・西田 睦，2010. 琵琶湖におけるコイの日本在来 mtDNA ハプロタイプの分布. 魚類学雑誌，57: 1-12.

（執筆者 浅香智也）

魚類 <コイ目 コイ科>

ヌマムツ *Candidia sieboldii* (Temminck et Schlegel)**【選定理由】**

本種は比較的水のきれいな自然度の高い河川に生息し、かつては市内の主たる河川の上流部に多く生息していた可能性があるが、現在分布状況が不明であり、情報が不足している。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	リスト外
環境省2014	リスト外

【形態】

体長 20cm。主鰭条数は臀鰭 9 条、側線鱗数 53～60 枚、側線上部鱗数 12～13 枚(細谷, 2013)。側線は完全で口ひげはない。体側中央に暗藍色の幅広い縦帯があり、腹部は白っぽい。臀鰭が大きく特に雄で著しい。産卵期に雄は明瞭な婚姻色を現し、頭部の下面や腹面が朱色や暗赤色となり、胸鰭、腹鰭の前縁もオレンジ色～赤色を現す。雌雄共に繁殖期に頭部、体表、臀鰭などに追星を現し、近縁なカワムツと異なり、鰓蓋にも出現する。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川支流、香流川。

【県内の分布】

矢作川水系、豊川水系、他。

【国内の分布】

東海地方以西の本州瀬戸内海沿岸、九州北部。ただし、関東、東北地方にも侵入。

【世界の分布】

日本固有種。

【生息地の環境／生態的特性】

平地から丘陵地の流れの緩やかな河川に生息している。雑食性で、水草、付着藻類、水生・陸生昆虫類を利用する。産卵期は 5 月中旬～8 月下旬頃とされる。

【現在の生息状況／減少の要因】

詳しい分布域や個体数は明らかになっていない。過度の河川改修によって減少したものと推察される。夏季の水温が比較的低く保たれている場所に生息するため、都市化によるこれらの環境悪化も個体数減少の一因と考えられる。

【保全上の留意点】

不用意な河川改修を慎み、河畔林の修復・復元により、隠れ場所、餌としての陸生動物、夏季の好適な水温条件を整えることが重要である。

【関連文献】

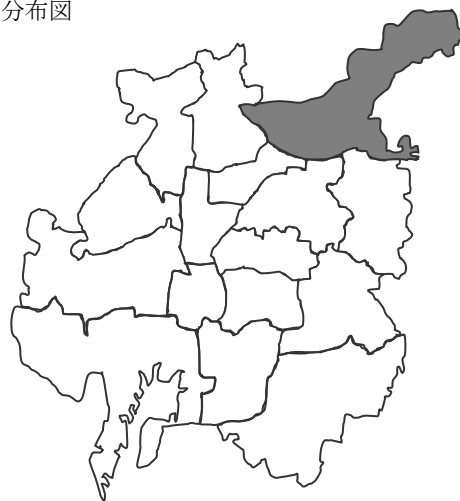
細谷和海, 2013. コイ科. 日本産魚類検索 第三版 全種の同定, p.318. 東海大学出版会, 神奈川.

Hosoya, K., H. Ashiwa, M. Watanabe, K. Mizuguchi and T. Okazaki, 2003. *Zacco sieboldii*, a species distinct from *Zacco temminckii* (Cyprinidae). *Ichthyological Research*, 50:1-8.

(執筆者 谷口義則)



市内分布図



魚類 <コイ目 コイ科>

ウシモツゴ *Pseudorasbora pugnax*

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	絶滅危惧ⅠA類

【選定理由】

1950年代に名古屋市内で生息が確認されていた。2000年代に入り、かつての生息記録がある他の自治体で再発見されている例もあることから、今後、詳細な調査が必要と考えられる。愛知県指定希少野生動植物種である。

【形態】

体長50mm。大型個体は体長80mmを超える。雄は雌に比べ大きい。体は円筒形だが、近縁種のモツゴに比べると体高や尾柄が高く、ずんぐりした印象を受ける。側線鱗は不完全で1枚から5枚。縦帯はあるが、モツゴやシナイモツゴと比べ、不明瞭で、それを欠く個体も多い。繁殖期に雄は黒くなる。追星も出るが、モツゴに比べるとかなり小さい。

【分布の概要】

【市内の分布】

1959年に旧鳴海町（現緑区）で記録がある。そのほか名古屋市の市境である豊明市の勅使ヶ池、若王子池でも記録があり、かつては緑区の扇川や天白川周辺に生息していたものと思われる。

【県内の分布】

豊田市、岡崎市（野生絶滅）、日進市、西尾市（野生絶滅）、小牧市（絶滅）、春日井市（絶滅）、犬山市（野生絶滅）。

【国内の分布】

三重県、岐阜県、愛知県。

【世界の分布】

日本固有亜種。

【生息地の環境／生態的特性】

現在確認されている他の自治体の生息地は、湧水を水源とする山間の溜め池に限定されている。カワバタモロコ、トウカイヨシノボリ、ミナミメダカ以外の魚類がほとんど生息しない場所で発見されることが多い。

【現在の生息状況／減少の要因】

溜め池の埋め立てや護岸の改修、オオクチバスやブルーギルなどの外来魚の侵入により減少したと思われる。モツゴと共存していた例（岐阜県養老町）もあるが、小牧市や春日井市ではモツゴが侵入して2年ほどで本亜種が確認できなくなった。飼育愛好家の過剰採集も脅威である。

【保全上の留意点】

肉食性外来魚とモツゴの侵入に注意する。産卵基質として比較的大きな沈石を好むため、池内にこのような沈石が多くあることも重要条件である。岐阜県で復元放流が成功している。1963年にウシモツゴという和名が提案される以前は、シナイモツゴ、シナイモロコとされていた。

【関連文献】

鹿野雄一・北村淳一・河村功一. 2010. 絶滅危惧種ウシモツゴの繁殖生態と保全策、および近縁種モツゴとの比較. 魚類学雑誌, 57(1):43-50.

Kawase, S. and K. Hosoya, 2015. *Pseudorasbora pugnax*, a new species of minnow from Japan, and redescription of *P. pumila* (Teleostei: Cyprinidae). Ichthyol. Explor. Freshwaters, 25: 289-298.

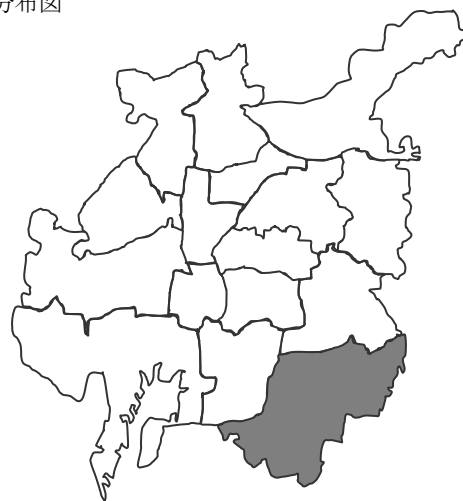
小林久雄・川口和美・広瀬利彦・大脇英男, 1959. 名古屋市外東部及び北部の淡水魚類. 名古屋・尾張北部の自然, pp.18-20.



ウシモツゴ

愛知県碧南市 2003年2月25日、碧南海浜水族館 撮影

市内分布図



(執筆者 大仲知樹)

魚類 <コイ目 コイ科>

カワヒガイ *Sarcocheilichthys variegatus variegatus* (Temminck et Schlegel)**【選定理由】**

河川やそれに続く用水路のコンクリート護岸化による生息場所の減少や産卵母貝の減少などにより分布域が縮小し、個体数が減少していると推察されるが、市内での生息情報は少ない。

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	絶滅危惧ⅠA類
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 12cm。体は細長く、吻は短く丸い。体側全体に不規則な雲状斑がある。同属のビワヒガイに似るが、尾柄高は頭長の49%以上であることから区別できる。

【分布の概要】**【市内の分布】**

庄内川水系。

【県内の分布】

木曽川・庄内川・矢作川・豊川水系など。

【国内の分布】

濃尾平野、琵琶湖流入河川、京都盆地、山口県を除く山陽地方、九州北西部、長崎県壱岐島。

【世界の分布】

日本固有亜種。



カワヒガイ

三重県松阪市、2007年3月6日、荒尾一樹 撮影

【生息地の環境／生態的特性】

河川の中～下流の緩流域とそれに続く用水路に生息する。砂底～砂礫底の中～底層を遊泳する。5～7月に二枚貝の外套腔内に産卵する（細谷，2013）。雑食性で水生昆虫や小型巻貝、付着藻類などを食べる（細谷，2001）。

【現在の生息状況／減少の要因】

市内の生息情報は少ない。庄内川水系で採集されているが、個体数も少なく、市外の上流域から出水などにより流下した個体が偶発的に採集された可能性も考えられる。河川や用水路のコンクリート護岸化は生息場所を減少させ、産卵母貝の減少要因ともなっている。

【保全上の留意点】

河川や水路等における砂底～砂礫底の緩流域やワンドの保全が必要である。また、産卵母貝の保全も重要である。

【特記事項】

愛知県内ではビワヒガイの移入も確認されており、競争や交雑の恐れもある。

【引用文献】

細谷和海，2001. カワヒガイ. 川那部浩哉・水野信彦・細谷和海（編），山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 改訂版，pp.310-311. 山と溪谷社，東京。
細谷和海，2013. コイ科. 中坊徹次（編），日本産魚類検索 第三版 全種の同定，pp.308-327,1813-1819. 東海大学出版会，秦野。

【関連文献】

駒田格知，2010. カワヒガイ. 愛知県環境調査センター編，p.213. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータあいち 2009 -動物編-，愛知県環境部自然環境課，愛知。
前畑政善，2010. カワヒガイ. 環境省自然環境局野生生物課（編），p.50. 改訂レッドリスト 付属説明資料 汽水・淡水魚類，環境省自然環境局野生生物課，東京。

（執筆者 荒尾一樹）

魚類 <サケ目 サケ科>

サツキマス・アマゴ *Oncorhynchus masou ishikawae* Jordan et McGregor

カテゴリー

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	準絶滅危惧

【選定理由】

かつては庄内川水系に遡上したが、水質の悪化、ダムや堰堤等の横断構造物設置により生息域が分断され、降海、遡上が困難となり、安定的な個体群は存在しないものと推定される。

【形態】

体長 40cm (サツキマス)。成魚の体側は銀白色でパーマークは消失するが、朱点が残る。降海途中の若い個体(シラメ)は背鰭の先端が黒化し、体側が銀白色で鱗が剥がれやすい銀化状態となる。降海するとパーマーク(楕円形の斑紋)が消失して全体が銀白色となる。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川水系、ほか。

【県内の分布】

矢作川、豊川を含む県内の主要な水系およびこれらの支流。ただし、水産放流個体を含む。

【国内の分布】

本州、四国、九州の太平洋岸および瀬戸内海に注ぐ河川。

【世界の分布】

日本、台湾。

【生息地の環境／生態的特性】

生まれてから1年目の春に降海するものが多い。11月～翌年3月にかけて降海するが、完全に降らず河川下流域に留まる個体もいる。降海後は伊勢湾および近海で甲殻類や小魚などを食べ、翌年の春に40cm程度に育ち河川を遡上し、その秋にアマゴと混じって10～11月に産卵して死ぬ。ふ化した仔魚は産卵床内で過ごし、3～5月に浮出する。

【現在の生息状況／減少の要因】

森林伐採や砂防ダムおよび河川改修工事による上流域におけるアマゴの生息環境が悪化している。さらに、流域に設けられた魚道の十分に機能しない各種のダムや堰堤によって、海とのつながりが断ち切られている。県内では、種苗放流による遺伝子汚染、ニジマス、ブラウントラウトなどの近縁な外来サケ科魚類の放流による競争・捕食の影響も懸念される。

【保全上の留意点】

降海する前の河川生活期は、年間を通じて水温が20℃以下の主に渓流域に生息するため、河川水温の上昇を防ぐ必要がある。水生や陸生の昆虫等を餌にするため、これらの餌となる付着藻類や河畔林が欠かせない。

【関連文献】

愛媛県, 2003. 愛媛県レッドデータブック, 447pp. 愛媛県自然保護課。
加藤文男, 1973. 伊勢湾へ降海するアマゴ (*Oncorhynchus rhodurus*) の生態について. 魚類学雑誌, 20(4):225-234.
中野 繁・谷口義則, 1996. 淡水性サケ科魚類における種間競争と異種共存機構. 魚類学雑誌, 43(2):59-78.

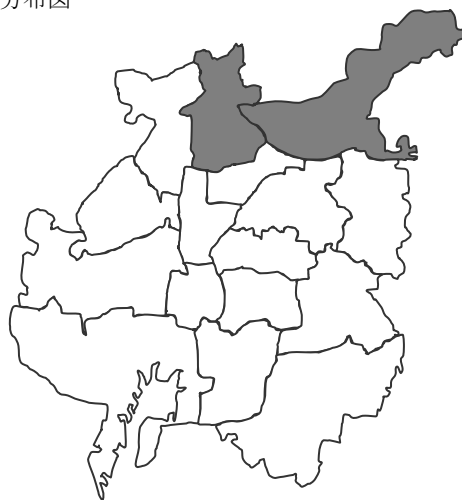
(執筆者 谷口義則)



アマゴ

設楽町豊川水系、2011年9月27日、荒尾一樹 撮影

市内分布図



魚類 <ダツ目 サヨリ科>

クルマサヨリ *Hyporhamphus intermedius* (Cantor)

カテゴリー

【選定理由】

生息環境の悪化等により、近年は激減しているものと推察される。市内における確実な採集記録・情報が少ないため現段階でのランク評価は困難である。

名古屋市2015	情報不足
愛知県2015	情報不足
環境省2014	準絶滅危惧

【形態】

体長 15cm。体は細長い円筒形で近縁種のサヨリに似る。体色は、背部が銀青色で、体側、腹部は銀白色である。下顎は長く突出し、その先端の下面が黒色であることでサヨリ（下顎下面の色は朱紅色）と識別可能である。汽水性の魚で、サヨリほど海域と河川を広範囲に回遊することはない。

【分布の概要】

【市内の分布】

庄内川。

【県内の分布】

木曽川の感潮域、油ヶ淵（碧南市）。

【国内の分布】

青森県から九州北部まで。

【世界の分布】

日本、朝鮮半島、中国、台湾、ベトナム。



クルマサヨリ

愛知県清須市西枇杷島町、2014年8月15日、間野静雄・好峯侑・淀太我 採集・撮影（標本番号 FRLM 49147）

【生息地の環境／生態的特性】

河川の汽水域から下流域に生息し、表層付近で浮遊性の動植物を食べる。繁殖期は春～夏で、水草や抽水植物帯に纏絡糸のついた粘着性の卵を付着させる。ふ化後、動物プランクトンなどを摂食しながら急速に成長し、翌年の産卵期には成熟して繁殖に参加する。寿命は1年と考えられている。

【現在の生息状況／減少の要因】

本種の生態から類推する限り、河口や汽水湖を中心に分布していたと考えられる。生息環境の水質悪化、河川水や流下する土砂の減少等による下流域の環境変化、埋め立てや護岸工事による抽水植物帯の消失、河口堰等による河川の分断は、成魚だけでなく卵や稚幼魚の生育場の喪失にもつながっている。

【保全上の留意点】

産卵場となる抽水植物帯の保全や創出、汽水湖など閉鎖的環境においては水質改善が必要である。また、河川改修や人工構造物の設置を検討する際には、本種の生活史や他の地域における減少事例を十分に調査した上で計画を立てることが重要である。遊泳性が強く飼育には広いスペースが必要であることから、生息域外保全は困難である。

【特記事項】

碧南海浜水族館には、1937年に油ヶ淵（碧南市）で採集された個体が当時の標本ラベルとともに保管されている（増田ほか、1996）。現時点では、県内における最も古い標本記録であると考えられる。

【引用文献】

増田元保・寺川 裕・島 達也、1996. 碧南市立西端小学校所蔵 油ヶ淵産魚介類標本. 碧南海浜水族館・碧南市青少年海の科学館年報, 9: 25-32.

【関連文献】

藍澤正宏・土居内龍、2013. サヨリ科. 日本産魚類検索 第三版 全種の同定, pp.651-654, 1927-1928. 東海大学出版会, 神奈川.

松井誠一、日本産サヨリ科魚類 2 種の生活史と増殖に関する研究 (1999～2001 年度). 科学研究費助成事業・研究実績報告書.

瀬能 宏、2001. クルメサヨリ. 山溪カラー名鑑 日本の淡水魚 第三版, p.424. 山と溪谷社, 東京.

（執筆者 地村佳純）

